

『源氏小鏡』

本文(活字の部)

凡 例

原文を活字化するにあたっての、方針や処置は、次のとおりである。

- 1、原文を、できるだけ内容の読み取りやすいような形に改めた。そのために、次のような処理を行なった。
- 2、原本では行を改めずに書き続けていることが多いので、適宜改行をした。
- 3、形式的な乱れを正した。たとえば、本文と、小さい字で書かれている注の字とが明らかに混交していると考えられる場合には、正常と思われる形に改めた。
- 3、仮名で書かれている語には、できるだけ漢字を当てた。漢字は、当用漢字に含まれているものは、現在の字体を用いた。また、一種の当て字や、現在は一般的でなくなっている表記を用いた漢字は、普通の漢字や仮名に改めた。

(例) 雲井↓雲居 比↓このころ

廿↓二十 哥↓歌

- 4、原本には施されていない、句読点、引用符号や、仮名の濁点を、加えた。特に、読点は、仮名の多い本文の読みにくさを救い、誤読を防ぐために、必要以上と思われるほどに、多く施しておいた。
- 5、おどり字符号(ゝ、く)は、それぞれの場合に該当する仮名や漢字に改めた。
- 6、漢字には、原本の仮名を漢字に改めたものや、読み取りやすいものを中心に、できるだけ多く振り仮名を添えた。
- 7、原本に見られる仮名遣いの誤りは、すべて、いわゆる歴史的仮名遣いによって統一した。時に語法上の誤りも見られるが、たとえば、「心得べし」とあるべきところを「心えべし」「心へべし」と書いてあるような場合は、いずれも「心得べし」という形に改めることで、仮名遣いの訂正に準じた処理をした。

また、活用語の語尾などは、「付べし↓付くべし」「三↓三つ」のように、必要に応じて送り仮名を加えた。これらのいずれの場合にも、原文を改めたことについては、一々示すことは、しなかった。

8、原本には、書写したあとで誤りの訂正などのために書き加えたと思われる、小さい字の簡単な傍注が、幾つか見られるが、これらは、訂正された形のものを示し、傍注などは削除した。(例、八一ページ六行め、二二六ページ五行め、など)

二、主として文脈や語法の上からみて、明らかに誤りと認められる場合、および、意味の通じにくい場合に限って、次のような方法で、原文を補訂した。

1、補訂のための対校には、原則として、明暦三年(一六五七)秋に刊行された『繪入源氏小鏡』(洛陽三条寺町誓願寺前、安田十兵衛開板)〈東京大学附属図書館・静嘉堂文庫・国立国会図書館などに所蔵〉を用い、必要に応じて、『源氏物語』の原文(吉澤義則著『對校源氏物語新釋』全六卷)をも参照した。

2、右の対校によって改めたり補ったりした箇所は、次のような形で示した。

(ア)「虫の音しげき」……原本の「虫ねのしげき」を「虫の音しげき」に改めたもの。

(イ)「渡したてまつり給ふ」……原本の「わたしてまつり給ふ」を「渡したてまつり給ふ」に改めたもの。

(ウ)「恨み・・などもせず」……原本の「うらみたるなどもせず」を「恨みなどもせず」に改めたもの。

3、以上の補訂のようなために行なった対校は、他本の『繪入源氏小鏡』の本文の全部にわたっていない点では、便宜的であり、不完全なものである。それを承知の上で、このような形の対校を試みたのは、高井家本の原文のままでは文意をたどりにくい箇所が少なくないので、ともかくも『源氏小鏡』という作品の内容を、とらえやすい形で示そうと、考えたためである。それに、この二種の本の本文は、形態も内容も、相違が大きくて、完全な対校を示しにくいことも確かである。

4、他本との対照によっても補訂できず、なお不明あるいは不自然と思われる数箇所については、へんげんのような形で、保留の態度または私見を、示しておいた。

三、連歌用語を抜き出して列挙してある箇所は、原本では、用語の上に打ってある点の有無が一定しなかったりして、不統一な面もあるので、用語には、すべてその上に。印をつけ、文中からは独立していることを明示した。なお、それらの用語の配列(改行のし方や、位置の上下など)については、原本の形を固執することは、しなかった。

源氏小鏡 上

五十四帖の目録

- 一 桐壺
- 二 帚木 ならびに 空蟬
- 三 若紫 ならびに 夕顔 末摘花
- 四 紅葉賀
- 五 花宴
- 六 葵
- 七 賢木
- 八 花散里
- 九 須磨
- 十 明石
- 十一 滯標
- 十二 絵合 ならびに 関屋 ならびに 蓬生
- 十三 松風

- 十四 薄雲
- 十五 槿
- 十六 少女
- 十七 玉鬘
- 十七のならびに

- 一 初音
- 二 胡蝶
- 三 螢
- 四 常夏
- 五 篝火
- 六 野分
- 七 行幸
- 八 藤袴
- 九 真木柱
- 十八 梅枝
- 十九 藤裏葉
- 二十 若菜 上下
- 二十一 柏木
- 二十二 横笛 ならびに 鈴虫

- 二十三 夕霧
- 二十四 御法
- 二十五 幻
- 二十六 雲隠とて、なし。これより末は、六帖、次第不
同に、宇治の宝蔵に籠められて、いまだ世にわた
らず。
- 二十七 薫 この巻を匂兵部卿ともいふなり。
ならびに 紅梅
ならびに 竹河
- 宇治十帖
- 一 橋姫
- 二 椎本
- 三 総角
- 四 早蕨
- 五 宿木 顔鳥とも。
- 六 東屋
- 七 浮舟
- 八 蜻蛉
- 九 手習

十 夢浮(橋)

以上五十四帖、源氏一部なり。
右の目録、あるいは、八九などと末を引き寄せ
てしるしたる目録あり。しかれども、それは用る(る)
べからず。宇治十帖は、格別のごとく、先代は、こ
れを用るられたり。かくのごとく、確かに心得てし
るす上は、源氏のこと、ゆめゆめ疑ひなく、かたく
これを用るられ侍るべし。

- 一 大内 ももしき 九重 みかさ
- 雲の上 うち
- 一 いづれも、内裏の総名と心得べし。
- 一 上とは、帝の総名なり。主上とも、天子とも。
- 一 上皇とは、院の御ことなり。
- 一 上達部とは、公卿のことなり。
- 一 大將上達部 大納言 左衛門督 中納言
- 一 右衛門督 などと、上官の人をいふなり。
- 一 殿上人などとは、五位、六位など下官をいふなるべし。

左大臣 右大臣 内大臣
いづれも、大臣を、おとどといふなり。

- 一 一の人は、関白太政大臣などをいふなり。
- 一 宮とは、皇子の総名なり。
- 一 東宮とは、帝に備はり給ふ皇子の御ことなり。
- 一 中宮とは、後の御ことなり。后は、一代に一人おは
します。女御は、幾人もあるべし。
- 一 内侍のかみ、宣旨などといふ女房は、女御の位より
は一階さがるべし。おほやけにては三番の女房なり。
更衣といふ女房は、内侍のかみより又一階さがるべ
し。四藤女房と見えたり。
- 一 命婦といふ女房は、更衣より又一階さがるべし。五
番のつかさなり。
- 一 中將の命婦、靱負の命婦などあれど、命婦は主典な
り。これより下は女官といひて、次第多し。妾女、
官途、これみな下藤女房なり。大方、官途といふつ
かさは、男も女も、一しなあづかり申すことあれば、
いづれの官途といふなり。この女房の出仕する所を
ば、台盤所といひて、別にあり。女房の侍なるべし。

男の侍をば殿上といふ。内裏の御すみの四十八殿と
いへり。

- 一 帝のおはしますは、南殿、紫宸殿。又、常におはし
ますは、清凉殿なり。弘徽殿、麗景殿、承香殿など
いふには、女御たち一頭づつ住み給ふ。帝、御心ざ
しの深き女御の御方へは、常におはしますなり。い
づれもいづれも、詳しくは末にしるし侍るなり。

一 桐壺

この巻を桐壺といふことは、これは、内裏のうちにあ
る御殿の名なり。淑景舎とは、桐壺のことなり。この桐
壺に、光る源氏の御母、さぶらはせ給ふ。さてこそ、桐
壺の更衣とは申しけれ。この更衣は、一の人などの子に
てはなし。父はなし。父は大納言にて失せにし人の子な
り。かたち名高き聞こえありて、宮仕へに内裏へ参り給
ひしぞかし。

帝、殊の外に時めかせ給ひしかば、かたへの女御、更
衣、御息所、そねみ給ふ。さるほどに、若宮(源氏の御)この

更衣の御腹に出で来させ給ふ。この宮三つになり給ふ夏のころ、御母の更衣かくれ給ふ。病限りなれば、内裏のうちにて人のかくれなどすること、なきなれば、御暇申して、里へ出でさせ給ふ。せめて御心ざしの切なれば、輦車の宜旨を給はりて、出で給ふ。この輦車、いみじき華飾のことなれば、おぼろげの人は許されざりしを、あまりなる御心ざしにや。

- 息も絶えつつ 更衣の苦しげなるけしき
- 愛宕の作法 これは愛宕にて更衣の茶毗なり
- 限りの使ひ 勅使たつ

さて、内裏を出でさせ給ひし折、帝、名残を惜しませ給ひて、さまざまのことをたまひけれども、息も絶え絶えにて、ものも申すやうなりしが、歌に、
限りとて別るる道の悲しきに

いかまほしきは命なりけり

御心のままならば、後の位にもなきまほしく、おぼしめしたりしかども、かたへのそねみをも、又、世のそしりをも、おぼしめして、失せて後、葬の所へ勅便を立てさせ給ひて、三位の位を贈らせ給ふ。限りの使ひこれなり

かくて、秋にもなりぬ。かの失せにし更衣の母も、同じく内裏にさぶらはせ給ひしが、若宮の御忌みのほどなれば、連れたてまつりて、里に住み給ふ。風、野分だちて、物あはれなる夕暮れに、内裏より、かの御里へ、靱負の命婦といふ女房を、御使ひにつかはし給ふ。そのことばにいはいはく、

- 八重葎 （わの）
- 虫の音しげき 鈴虫
- 雲の上 宮城野の小萩
- 露置き添ふる 浅茅生の宿

これは、更衣の里にてのことばなれば、なき人の宿などいふことあらば、付くべきなり。帝より御文に、更衣の母のもとへ、若宮の御ことをよみ給ひし御歌に、
宮城野の露吹き結ぶ風の音に

小萩がもとを思ひこそやれ

と、よみ給ひしなり。この御使ひ帰りに、贈り物に、更衣の残し置かれたる調度めくものを取り出でて、つかはされしなり。贈り物といふことあらば、なき人などに付くべし。この更衣の、人にねたみそねまれて失せし人なれば、その心ねもあるべし。

かくて、源氏、七つの御年より御書始めあり。学問し給ふに、琴・琵琶の音にも、雲居をひびかす。何事も、人には異なり。そのころ、もろこしより、博士渡りたるに、この若宮を相せさせらるるに、この若宮の御かたち、光りかがやき、うつくしくおはしけるに、ただ光る君とつけたてまつりしより、源氏をば光る君とは申すなり。

- 御ふみ作る これは高麗人ふみを作るなり
- 四塚 源氏その年七歳なり

かの博士あひし所は、鴻臚館なり。今の四塚なり。

源氏の初冠といふ事、

- 初元結 濃紫
- 盃のついで 盃のついでに葵の上のこと
- あげまさり 冠し給へる御かた、幼き時よりもうつくしきとなり
- 源 これは、源氏の姓を賜はらるるなり

源氏の君、十二にて元服、その日、源の氏を賜はりて、ただ人になり給ふ。いはゆる光る源氏、これなり。かの元服の日、引き入れの大臣の御むすめ、帝の御はからひにて、あはせたてまつりて、やがてその夜、かの大

臣のもとへ、おはします。これを葵の上とは申すなり。初元結、濃紫といふことは、宮などの元服の折、濃き紫の糸の平組にてとることあり。それぞれに寄せたることなり。又、葵の上の父大臣、引き入れに参り給ふは、武家に烏帽子親などのごとく侍り。その心にとおぼえたり。これは、かうぶり、初もとゆひ、などいふことに付くべし。

この巻に、輝く日の宮と申すは、藤壺の後のことなり。源氏の継母にておはします。この後は、源氏の御母更衣かくれさせ給ひて後、帝、おぼしめし嘆かせ給ひて、御心慰ます。年月経れども、忘れがたくおぼしめして、朝に起きさせ給ひても、明くるも知らずとおぼしめし、暮るれば、むなしき御床もさびしくおぼしめして、かたへの女御たち、御局もすましましめて、絶えて御宿直もなし。雲の上も涙にくれてなど、嘆かせ給ふほどに、帝の御ために御姪にておはします。先帝の四の宮、御かたちすぐれて聞こえ名高き姫宮のおはしますを、母后など、いみじくいたづきこえさせ給ひしを、内侍のすけと聞こえし女房、聞き出して参らせ給ひけるに、まことに御心慰

ませ給ひて、御心ざし、昔の更衣になずらひ給ふ。源氏を光る君と申せば、この姫宮、輝くさまにおはしませば、輝く日の宮と、世の人申しけり。御局は藤壺なり。

この宮をば、源氏、幼くより、おほけなく心にしめておぼしめす。つひに、忍び忍び参り給ふ。御子一人出て来させ給ひて、冷泉院と申せしは、この御事なり。又、桐壺の帝、源氏の父帝と申すこと、この巻より見え給ふ。主上にてましますせば、桐壺の帝と申すなり。たとへたてまつる帝は延喜の御事と見えたり。

二 帚木

源氏十六歳の五月の事なり。

この巻に雨夜の物語といふことは、源氏の君、御方違へに内裏の御とのる所におはします御つれづれ慰めんとして、そのころ頭の中將と聞こえしは、源氏の御小じうと、葵の上の御兄なり。かの君と、馬の頭、藤式部といふ殿上人、参りて、くまなきすき者どもなれば、物語申すついでに、人の品を分かち、よしあしのことを定めて、これを雨夜の物語、品定めとはいふなり。

びて、とかくのたまふに、女、思ひかけず思ひて、

園原や伏屋に生ふる名の憂さに

あるにもあらず消ゆる帚木

この人は、わが品なども、思ひあがりたる人にてあらねども、伊予の介などが妻になるべき人にはあらずや。親などなくて、見あつかふ人もなければ、思ひの外に、かくてゐたり。心根を卑下して、よみしなり。

さて、とかく言ひて、ほのかにあふ。そのままにて、しばらく立ち寄り給ひしかども、つひに、又もあひたてまつらず。いよいよ源氏は、御心尽くしに思ひ給ひけるとかや。末の世まで忘れ給はで、伊予の介死して後、厄になりてありしを、迎へ給ひて、二条の院の東の対に住ませられき。伊予の介の家は、中川のわたりなり。今の京極川なり。方違へに付くべし。

この物語に、撫子と玉鬘を語り出すことは、頭の中將の物語なり。馬の頭の物語には、わが通ふ所のもとへ、若き友だちのやうなる人通ひけるを知らず、内裏より出でけるに、この上人、車に乗りて行かんと言ふを、いづくぞと思ふに、わが行く所なれば、あさましと思ふに、

○ふみ ○博士のむすめ
○ひるま過ぐせ ○撫子これら物語と心得
○手を折りてこれら物語に付くべし ○菊の宿

この巻に、頭の中將の物語に、玉鬘の内侍のかみのことを、撫子と語り出でしは、母夕顔の上のことぞかし。物語に、撫子といふことあらば、玉鬘と心得べし。

さて、この方違へは、四月なり。節分ならでは、方違へはせぬこととは、思ふまじ。昔の上臈は、四季に方違へといふことありしなり。さて、思ひ明きしかば、里へ出でさせおはしませんが、塞がる方にて、わろし。御家人の伊予の介といひしがもとへおはして、方違へある。かの家のあるじ、よろこび、かしこまる。

この方違へに付くべきなり。
○遣水 ○柴垣 ○涼しきかけ など

伊予の介が家の遣水、泉水など、おもしろかりし。こにおはして、方違へあり。さて、あるじの伊予の介は君のおはします方に御宿直したるに、源氏、忍びて、女房どもの寝たる所へおはして、御立ち聞きし給へば、所近く、わが上のことをぞ言ふなる。静まるほどに、忍

この男、笛吹きて、そそなはかせば、内より和琴をひく。この宿に、菊あり、紅葉ありけるに、

琴の音も菊もえならぬ宿ながら

つれなき人をひきやとどめん

それより、この女のもとへ行かず。されば、好きたはめらん女には、心を置かせ給へと、この君だちに申したりしなり。

又、頭の中將の撫子とは、忍び忍び通ひ給ひて、いと浅からざりしに、幼き人さへ出で来て、この世一とも思はざりしを、うるはしき北の方より、おそろしきことを言ふと聞きて、かすかなる家に隠れてゐたり。ある時、頭の君おはしたるに、さかさかしく恨み、などもせずうち涙ぐみて、姫君のことを、
山がつの垣ほ荒るとも折々は

あはれをかけよ撫子の露

後、ほどなく行き隠れたり、と語り出しても、涙ぐみたり。この人ぞかし、夕顔の巻に、源氏にあひて、某の院にて死にき。撫子は玉鬘なり。十七の巻に見えたり。又、藤式部が物語は、博士のむすめのもとへ通ひしに、

ある時、行きなれば、物越しに見参して、あはず。いかにと問へば、極熱の草薬服して、臭きによりてあはず、と言へり。六月の蒜にや、この香あさましく臭し。鬼とこそ向かひたらめ、と思ひて帰りしに、この女、歌に、

あふことの夜をし隔てぬ仲ならば

藤式部、

ささがにのふるまひ著き夕暮れに

ひるま過ぎせと言ふぞわりなき

とよみて、そのまま行かず。まめまめしき人は、又、こはごはしく、むつかしく、世の中、思ふさまならぬところを、うち乱れて語りしより、源氏は、いとど隈なき御心出で来させ給ふ。

ならびに 空 蟬

源氏十六歳の事なり。

この巻を空蟬といふことは、帚木の巻の方違への時、伊予の介が妻を、源氏御覧して、飽かず忘れぬことにおぼして、かの家居の遣水おもしろしとて、にはかに、又、

かれがもとへ、おはします。あるじは、遣水の面目と、喜ぶ。されども、その夜も、あひたてまつらず。むなく帰り給ふ。なほ、御心にかかりて、いかにしてか言ひ寄らまし、とおぼしめして、かの弟兄、まだ十二三ばかりにて、童にて、姉のもとに伊予の介が、ありしを召し出して、やがて殿上をさせ、わが家人になして、いとほしく言深くし給ふ人、その心を知らず。この童に、くはしく言ひ知らせ給ひて、この小君を御使ひにて、御文あり。その後、伊予の介、田舎へ下る。人少なかる折、この小君を連れさせ給ひて、一つ車に召して、中川へ渡り給ふ。皆人は、この幼き人ばかりと思ひたれば、源氏は車の内に隠れて、人静まりて、かの小君をしるべにて、のぞき給ふに、かしこに、継娘の、西の御方といひて、暮打ちてゐたり。

○暮 ○かいま見 ○夕闇

○道たどたどしきほど ○一つ車

○ともし火 ○小君

○十 二十 三十 四十 西の君参打ち果てて 数へたる心なるべし

さて、打ち果てて、もろともに臥すを御覧じて、静ま

るほどに、忍びて入らせ給ふに、かの女は、とけて寝られねば、いとく聞き知りて、すべり隠れぬ。これを、

同じ所に寝つるむすめの隠ると思ひたれば、これをば残しおきて隠れぬ。蟬のもぬけのごとく、衣ばかり残したり。心ならず、このむすめにあひて、をこがましかるべければ、あまたたびの方違へなども、これゆゑぞ。人の名や洩れなん、とおぼして、語らばせ給ひしかども、

ならびに 夕 顔

源氏十六歳の夏より 十月までの事なり。

この歌ゆゑに、巻をも女をも、空蟬とは付けられたり。これら、皆、夏の事なり。空蟬には、いかに、人違へ、一夜の契りなど、引き合はせて付くべし。

もとより御心ざしあらざれば、又ともあひ給はず。その後、一夜の情に、端のをぎといふ御歌あり。御返事に下をぎとよみたりしほどに、この人をば、下をぎとも、軒端の萩とも付くべし。

さて、御心ざしの人の脱ぎ置きたりし衣を、取りて帰り給ふ。

○取りて帰る衣 ○人香身にしむ

さて、あした、御文あり。

空蟬の身を替へてける木のもとに

なほ人柄のなつかしきかな

女の返しに、

空蟬の羽に置く露も木隠れて

この巻を夕顔といふことは、六条の御息所と聞こえしは、先坊とて、東宮にてかくれ給ひし御息所、六条わたりに、いとやんごとなくて、おはしましき。これは、桐壺の帝の御弟にておはしましき。東宮にてかくれさせ給ひしかば、いとあへなくおぼしめして、姫宮のおはしますをも、うちの御子のごとくおぼしめしけり。この御息所へ、源氏忍びつつ参り給ふ。いとかたじけなきことと、世の人申し思ふ。さて、しばしば通ひ給ふ道、五条なる所に、夕顔の咲きかかりたるに、小家あり。うちに女どもあまた、よしありて住める、透き影見えけり。これは帚木に頭の中將の語りし、撫子といふ女君の母の、隠れてゐたる所なり。ある夕暮れに、例の五条わたりの

忍びありきに、御車を立てて、夕顔の花の白く咲き乱れたるを、何ぞの花ぞと尋ねさせ給ふに、うちより、不審なくかの中将ぞと思ひて、これに置きて参らせさせ給へとて、花を折りて白き扇のいたく芳ばしきを奉る。

○白き扇 こがしたる 芳ばしきなり ○たそかれ時
○そら目 中将かと 見誤る ○檜垣 ○小家

○切懸 だつもの 夕顔にてをとりせたる 切懸
○遺戸口 遺戸口にて のぞく事なり
○うちまねく これは夕顔 に付くべし ○透影
さて、源氏の歌に、

寄りてこそそれかとも見めたそかれの

ほのぼの見ゆる花の夕顔

さて、夕顔の巻とは、つけられたり。すなはち、女をも夕顔の上といふ。かくて、惟光に仰せつけて、よくよく案内させ、時々おはしませぬ。これや、頭の中將の語りし撫子の母にやと、あやしく思ひながら、あさからず通ひ給ふに、あきにもなりぬ。八月十五日、暁に、某の院にいざなひ給ふ。その夜は、かの小家に、とまり給ふに、隣の家に、目さまして、聞き知らず、かたはらい

るに、起き臥し語らひて暮らし給ふ。
○しののめ ○しり目 ○露の光
○同じ車 ○水草に埋もるる池 ○弦打ち
○鳥のから声 ○荒れたる宿
絶え入りぬれば、言ひやる・かたなし。源氏、御太刀を引き抜きて持ち給ふ。物の足音、ひしひしと鳴りしなり。これも心付て付くべし さて、いかげんとて、惟光を召して、仰せあはせられて、清水に惟光がしるべのあるかたへ、むなしき骸を取り出して、亡骸を、上むしろにおしくくみて出せば、髪こぼれ出でて、目もあやなり。この車には、かの使ひし右近といひし女房、乗りそひて行く。心のうち、思ひやるも悲し。されば清水などを付けたらん、あらがふべからず

あさましくおぼして、惟光を召し具して、清水におはして、亡骸を御覧じて、いとと思ひまさり給ひしが、うちかはし給ひしまま取り出したれば、わが紅の御衣、そのまま着たりしおもかけ、いかならん世にか忘るべきと、沈み入らせ給ひて、帰らせ給ひて、やがて御心も例ざまにもおはしまさで、世の騒ぎにて、秋の末にぞ、おこたり給ひし。まことに、ことわりなり。かの右近をぞ、

たき物語などする。

○御嶽精進 ○摺だつもの 女房の着るものなり
○ぬかつく 隣につくから日のことなり

これは、夕顔の家に付くべし。御嶽精進には、よくよく彌勒慈尊と拝むを、聞かせ給ひて、長生殿の羽を交はし枝を並べし契りは引きかへて、彌勒の世をかねて、五十六億七千万歳までと、おぼしけるにや。

優婆塞が行なふ道をしるべにて
来ん世も深き契り絶えずな

息長川・など契らせ給ひしに、十六日の夜中に、死に給ひしぞ、まことにあはれなりし。

さて、十五日の暁に、一つ車にて某の院へいざなはせ給ふ。しののめの、ほのかなるに、露の光やいかに、とのたまへば、

夕露の紐解く花はたそかれの

ほのかに見えし縁にこそありけれ

光ありて見し夕顔の上露は

たそかれ時のそら目なりけり

など言ひかはして、十六日一日は、かの某の院の荒れた

忌み過ぐるままに召し寄せて、局などして、いとねんころに、はごくませ給ふ。ふくらかに色黒き女といふは、これなり。後に玉鬘の君に、初瀬にてたづねあひて、六条の院へわたしたてまつり給ひて、この方に侍りしなり。源氏も、はかばかしきものにおぼしめして使ひ給ひし人なり。

三 若紫 源氏十七歳の三月より 同じき冬までの事なり。

この巻を若紫といふことは、紫の上の幼かりしを、よみ給ひしなり。
手に摘みていつしかも見ん紫の
根に通ひける野への若草

若紫とは、幼き文字なればなるべし。これは、源氏、継母の藤壺の宮を幼くより心にかけて、何としてか遣る方なく、人の数を御覧するも、もし御心もや慰むと思ふゆゑなり。なすらひにだにあらぬ世の中も恨めしくおぼすに、この紫の上は、藤壺に御姪にておはしませば、うらなくよませ給へるゆゑに、物のゆかりをば、紫の草

のゆかりといふことなれば、よそへてよみ給ひしゆゑ、この巻を若紫と書けり。ことさら、この巻おもしろく作りたりとてこそ、式部の君をば、後に紫式部とは、つけさせ給ひけれ。

さても、この君を御覧じそめて、長き世の友となり、この人ゆゑ雲がくれ給ひしことは、源氏十七の年、わらは病みをして、北山にたつとき聖ありとて、召しけれども、京へ出でぬこととて、参らず。さてはとて、北山へおはします。かの聖、加持したてまつりたれば、おこたらせ給ひぬ。なほ残り恐ろしとて、その日とまり給ひて、御加持など参り給ふ。つれづれなれば、立ち出で、ここかしこ、のぞき御覧すれば、女の住める所あり。何事にかはとおぼして、のぞかせ給へば、かの姫君の祖母は、この瘧落としたる聖の御弟子僧都の御姉なり。この祖母君、心地悩み給ふほどに、祈りなどせんとて、この山におはしまししなり。姫君をも連れておはしましたるを、のぞきて御覧じはじめさせ給ふ。

- 小柴垣 おこしばかき
- 夕暮れの霞 ゆふぐりのかすみ
- わらは病み わらはのびやみ おこり
- おこたる おこたると なほりたることなり

とおぼしめし、かの僧都に問ひたてまつり給ふ。祖母君にも言ひ寄りなどして、つひに、その年の九月のころ、祖母君におかれて、京の殿に、かすかなる住まひにておはしまししを、源氏、とりたてまつらせ給ひて、二条の院の西の対へ渡したてまつり給ふ。姫君、十の年なり。かのわらは病みして北山へおはしまし侍るころは、つごもり、さてこそ、京の花は盛り過ぎ、散り果てて、山の桜はまだ盛り、とは言ひたれ。北山に雀といふこと、花につくることは、紫の上、雀の子を飼ひ給ひしに、犬君といひし童、逃がしてありしを、紫の上、いたく惜しみて泣き給ひし姿の、いとつくしかりしを、源氏の君、御覧じそめてけり。鳥といふこともありと、人言へども、あらがふべからず。逃げつる雀の子を、鳥などや取りつらんと、紫の上のたまひし声ぞかし。鶴の一声といふは、紫の上、源氏入らせ給ふを、祖母君見給へ、とのたまふ声を源氏聞き給ひて、かくいふなり。

- この巻に、
- 草むしろ くさむしろ
- 遣水 ついでみづ
- 齋 いひ

などいふこと、これは、僧都の坊へ源氏をよびたてまつ

- 後ろの山 うしろのやま 知る人の山をいふ
- 雀の子 すずめの子
- 山の花まだ盛り
- 若草 わがくさ 紫の上のことなり
- 滝の音 たきのね
- 鶴の一声 つるのこゑ
- 谷の底まで掘り求むる やのそこまでほりたづね 山の鳥おどろく
- 草のむしろ くさのむしろ 北山の遣水なり
- 花ちかき はなちかき 幼き人の手
- 紫の上の、花近きなりとも見んと、のぞき給ふなり。
- 源氏北山にて琴をひき給ふに、山の鳥もおどろくらん、となり。
- かいま見 かいまみ
- 犬君 いぬきみ 人の名なり
- 横の戸はそ よこらのと
- 旅寝の袖 りよ寝のそで
- み山おろし みやまおろし
- 藤桜に付くる壺 ふじざくらにつくると

これらは、北山にての事なり。この紫の上は、先帝の御子に兵部卿の御むすめ、藤壺の后には姪なり。この北の方は、北山におはせし紫の上の祖母の御むすめなり。幼くより御母にもおくれ給ひて後、祖母君に育てられておはしまししなり。この姫君のうつくしき御かたちを、かいま見給ひて、いかにしてか、これをとりたて、わが御ままにかしづきたてて、かの御かたみに見たてまつらん、

るとて、草のむしろもこの方にこそ設けなめ、と申されたるなり。齋とは、御精進のものことなり。北山に物語といふことありと、人いふとも、あらがふべからず。御心地のまぎらはしに、人の立ち出でて所々御覧するに、いとおもしろければ、御供の人々、富士の山、某の嶽、須磨、明石の物語を、名所なれば申し出したる。その時明石の上のことをも聞きそめ給ひしぞかし。

又、紫の上、二条の院へ迎へたてまつりし朝、火色の衣を着せたまつる。といふことはこれは九月、十月に源氏とりたてまつり給へば、いまだ服のうちなれば、わざとその朝ばかり、火色の衣を着せたまつりたり、とおぼゆ。これらを秘事といひたり。かくて、心ざし並ぶ方なくて、源氏は五十三、紫の上四十五にて、かくれ給ふ。源氏雲がくれ給ひしも、この御嘆きゆゑなり。雲隠れとは、通世のことなり。二十

ならびに 末摘花 すまづきはな 源氏十七歳より十八歳の春までなり。

この巻を末摘む花といふことは、常陸の宮と申して、古き

宮おはしましき。失せ給ひて、御あとに、姫宮一人残り
ておはしき。いとかすかなる御すまひにて、ながめ過ご
し給ひけり。源氏、聞き伝へさせ給ひて、いぶかしくお
ぼしめして、尋ねたてまつるに、源氏の御乳母、少将の
命婦とて、内裏に侍りけるが、この宮に親しく参り通ふ
人なれば、道しるべして、見せたてまつり給へり。いと
思ひの外におはしけり。このかたち、色しろく、鼻長く、
先赤く、象のごとくにおはしけり。源氏、見そめたてま
つりけんこと、くやくしくおぼしけれども、このすがたを、
われならで誰か見たてまつらんと、あはれに、人の御ほ
どと言ひ捨てがたく、いたはしくおぼして、後に方々の
数に入れて、二条の院に、東の対に住ませきこえ給ふ。
源氏、御歌に、

なつかしき色ともなしに何にこの

末摘む花を袖に触れけん

と、よみ給ひしなり。紅は、花の先赤きものなり。末
摘みてとるゆゑに、末摘む花とはいふなり。この君、
寒き折は、御顔に赤き木の実をつけたるがごとし。こと
にふれて、をかしくおはしき。皮衣を着たる人、これな

り。この君を心にくく思ひて、葵の上の兄、頭の中將
も、心をかけて、源氏のおはしたるを見あらはさんとて、
あとにつき行きて、つひに見あらはして、その歌、源氏
の御袖をひかへて、
もろともに大内山は出でしかど
入る方見えぬいきよひの月
十二月十六日の事なり。この女君、きんの琴をひき給
ひしなり。

荒れたる宿のこと ◦わび人
春のいきさよひ ◦皮衣これ末摘に付くべし

もろともに出でし大内山

などは、付くべし。頭の中將には、まことなし。末摘む
には、見劣りしてくやしきやうを付くべし。荒れたる宿
のことなど、付くべし。

四 紅葉賀

源氏十八歳の正月より
又の年の十月までの事なり。

この巻を紅葉の賀といふことは、桐壺の帝、そのころ、
院の御賀をつとめ給ふに、ころは十月なれば、紅葉をも

てなして御賀あり。紅葉の下にて、伶人あり。殿上人
宮たちも、その器量たるは、舞ひ給ふ。その姿・源氏の
青海波舞ひ給ふに如くはなし。うつくしき、たとへん方
なし。片・手には、頭の中將、舞ひ給ふ。源氏には、け
おされて、かたはらの深山木とぞ見えし。このこと 挿頭の紅
葉、いたく散り過ぎて、顔の匂ひにけおされて、左大將
立ちて御前の菊を折りて、さしかへ給ふ。夕映えの姿か
がやきて、そぞろ寒きほどなり。

◦挿しける菊挿頭の葉なり ◦足踏み舞の姿
◦夕映え ◦顔かりのほひ ◦木高き紅葉

樂は青海波なり。青海の波とも。立ち居につけて、と
いふ歌あれば、これを引き寄せて付くべし。その夜、藤
壺の宮、わが舞の姿をも御覧じつらんと、源氏おぼして、
忍びて御文あり。

物思ひに立ち舞ふべくもあらぬ身の
袖うち振りし心知りきや

御返し、

唐人の袖振ることは遠けれど
立ち居につけてあはれとは見き

とありしなり。唐人の袖振ることは、もろこしの楊貴妃
の霓裳羽衣の舞を、よそへけるにや。

この巻に、かの藤壺の御腹に、御子生まれ給ふ。これ
は、まことは、源氏の御子にておはしけれども、帝、こ
れをば知ろしめさず、たぐひなき御人おぼえて、五つに
て東宮に立ち給ふ。十一にて御位につかせ給ひにし。御
治世十八年、これを冷泉院と聞こゆ。

◦撫子 ◦露けさまさる
◦昔結べる契り ◦この世にかかる

これは、この巻に侍ればとて、紅葉などに付くべから
ず。この巻にあることなれば、しるす。又、この巻に、
源氏、内裏の女房源内侍のすけといひて、そのころ年五
十八の人なり。源氏は、十九になり給ふ。かの女房にた
はぶれ給ふ。

◦親の親 ◦雨のなごり ◦琵琶の音
◦扇 ◦温明殿 ◦東屋うたふ

これらは、夕暮れなどに付くべし。心は、夕立して少
し晴れたるなごりに、内侍所のまます御殿の方さまを、
源氏、たたずみて、東屋うたひて、うそぶき給ふに、こ

の源内侍のすけ、琵琶の上手にて、かきしらべてゐたりし所へ、立ち寄らせ給ひて、物言ひかはし給ふ。さて、昼の御方の御梳櫛果てて、これを御覧じ、笑はせ給ふ。内侍のもとにおはしたる夜に、頭の中将来りあひて、源氏の君を、そらおどしして、後まで笑ひぐさにしたりしなり。この巻にあることなれば、しるし侍るなり。紅葉には付くべからず。

五 花宴

源氏十九歳なり。この巻にて宰相中将なり。

この巻を花の宴といふことは、かの紅葉の賀の次の年の春、内裏に花見あり。南殿の花の盛りに、花のもとに御遊あり。題を賜はりて、宮たち、公卿、殿上人、地下に至るまで、詩を作り給ひしなり。中にも、源氏の小じうと、頭の中將は、春の鶯囀る、といふ題を給ひけり。その後、去年の舞をおぼしめし出させ給ひて、そのころ東宮は朱雀院にましましける。源氏には御兄、切に責めさせ給へば、源氏も、立ちて舞ひ給ふ。頭の中將、立ちて柳花苑を舞ひしが、おもしろさに、御衣かづけ給ふ。

これ、後代の例となりぬべし、と言ひあへり。これは後の世の花にも舞はよか

さて、その夜、源氏、さりぬべき隙もやと、例の藤壺のわたりを、たたずみありき給ふほどに、弘徽殿の三の口に立ち給ふ。内より女の声の、なべてならぬにて、朧月に如くものはなし、と詠じ給ひしほどに、源氏、いとおもしろくおぼえて、言ひ寄りて、この人ゆゑぞかし、須磨の女房は、東宮の御母弘徽殿の御妹、六の君とて、東宮へ参り給はんとて、もてなし給ひしが、この花の宴の舞御覧のために、内裏へ参りて、とまり給ひたるなるべし。暁、里よりの御迎ひの人々にも、かくと心得給ふ。

- 三の口 ○扇 取り添ふる ○草の原
- 露のゆかり ○小笹が原

これらは、ここにてよみし歌のことばなり。扇をば、しるしに取り交はし給ふなり。内侍のかみの扇は桜の三重がさねに、雲に霞める空の月を水にうつしたる心得て付三の口なほあらじとてなどいふことはよし。この巻の花のえへ念ふにはかの扇のこと名句なり。ころは二月の二十日、さて忍び忍びにあひ給ひしこと聞こえて、帝かくれさせ給ひて、東宮の御代になりて、継母の弘徽殿の悪后、

心のままに世をとり行なひて、もとより憎かりしことなれば、九の巻に、源氏を須磨へ流す。さてこそ、六の君も、つひに女御とだにいはで、内侍のかみにておはしましけり。

六 葵

源氏二十一、二歳と見えたり。この巻にて大将になり給ふ。

この巻を葵といふことは、一の巻に、源氏、十二にて元服、その夜より、やがて婿になりておはしまし、北の方を葵の上といふ。この巻に、源氏の御兄朱雀院の御腹の姫君、賀茂の齋に、備はり給ふ。御もとに、源氏は、そのころ大将にて、つかうまつり給ふ。そのけしきいみじき御ことにて、人々目を驚かす。

北の方、そのころ、ただならぬ御心地にて、夕霧の大将をわづらはしくおはしませば、御心地慰めにとて、出でて御覧するに、又、源氏の通ひ給ふ六条の御息所も、忍びて出で給ふ。車の立て所を、御供の人々争ひて、御息所の御車を、うち損ざしなどせしなり。車争ひ、これなり。賀茂の祭のことなれば、葵の巻といふなり。この恨み

深くして、つひに、物のけになりて、この巻の八月に、葵の上を、とり殺し給ふ。この御息所へ、源氏、忍びて参り給ふこと、帝、院の上も、知らせ給ひて、世にも隠れなきに、離れ離れなるに、御心ざしの思ひは、須磨の恨めしき折節、かかる恥ぢがましきことさへあれば、いとど思ひ沈みて、物のけになり、それより、源氏、いよいよ御心ざし離れ離れになりゆくほどに、人をも世をも恨み果てて、御むすめの姫宮、伊勢の齋宮に下着ありしに、ひき連れて下り給ふ。伊勢の御息所

- 争ふ車 ○ねたむ ○数ならぬ

などといふは、この御息所のことなり。句によりて付くべし。賀茂の祭に、髪そぎといふことあり。祭の日、紫の上と一つ御車にて、御覧じに出で給ふが、御髪、こちたく長く見えさせ給へば、曆の博士に時とらせて、紫の上の御髪を、そがせ給ふ。御髪そぎ果てて、千尋と祝ひて、源氏、よみ給ふ。

量りなき千尋の底の海松ぶさの
生ひゆく末をわれのみぞ見ん
紫の上の返しに、

千尋ともいかに定めん量りなく

満ち来る潮ののどけからぬに

これは、四月賀茂の祭をば、御阿礼ともいふべし。かやうの歌など引きあはせ、ことばにそへてよし。

さるほどに、葵の上・月は重なりて、御産近くなる。

御息所、深き恨みなれば、おろかならんや。御惱み大事にて、限りのさまなれば、(まつりことば) 賦(ま)、さまざまの折(ま)り、加持、思ひやるべし。その折、御息所、みづから名のり出でしなり。この葵の上の御方に、護摩を焚きて、芥子といふものをまつる。御息所の御衣に深くしみしこそ、恐ろしかりけれ。

さて、かくして、若君夕霧の生まれ給ふ。このほどの心尽(よ)くしに、いふ限りなく喜びののしる。皆人もうち休み、少し心ゆきて、若君の御もてなしに日を送るほどに、御産屋、二十日ばかりありて、母葵の上、つひにかくれ給ふ。折節、秋の除目なれば、源氏の君も、父の大臣も、内裏へ参り給ふ。これぞ、限りなりける。源氏、おはしまして、さまざま、うち語らひて出で給ふに、常よりも御目とまりて、御覽じ送りけるとかや。あはれなりし事

どもなり。

すでに絶え入り給ひぬれば、内裏へ告げ聞こえたれば、その夜の除目も、やぶれぬ。足を空にて、帰り給ひぬれども、かかる隙をはからひたる物のけなれば、かひあらんや。大臣、母宮(この母宮は源氏の御をば、御養の帝の御妹なり)、源氏の君の、御心のうち、思ひやるべし。八月十五日のことなれば、もしや生き返り給ふとて、さながら二十日まで置きたてまつらせ給ひけれども、変はりゆくことのみあれば、そのかひなくして、つひに鳥部野へ送りたてまつり給ふ。

○独り寝 ○形見の子 ○忍ぶ草

○鈍める御衣源氏服を着給ふ。これは別れの儀にて秋の別れなどあらは付くべし。

四十九日過ぎて、わが御殿二条の院へ帰り給ふに、御年十二より、いまだいはけなかりし(その年源氏 御ほどぞかし)。住みなれ給ひしに、北の方かくれ給へば、何ゆゑにかは、かの大臣のもとにも住み給ふべきなれば、若君をば、この殿に留めたてまつりて、わが御殿へ、帰り給ふ。折節、あはれき、言はん方ぞなき。十月のことなれば、時雨降り荒れて、今さら涙を、もよほしけり。

大殿を始めたてまつりて、日ごろ宮仕へなれし女房な

ど、心納めやらず、袖をしぼる。源氏の君も、立ち去りがたく、名残悲しく、おぼしめしながら、泣く泣く帰り給ひて、紫の上の御方へ渡り給ふ。しばしのほどに、いみじく盛り(ま)にねびととのひて、うつくしく、見放ちがたし。この紫の上の、十の御年より、とりもちて育て給ひ

しかども、いまだ幼くおはするこの姫君も、源氏の、わがものにおぼしめしたるとは、ゆめゆめおぼしもよらず過ぐるほどに、ある夜、紫の上(その年)、新枕あり。次の夜、源氏の御心知りの惟光を召して、のたまふことあり。「こよひは、子の子の祝ひなり。明日の夜、かやうに餅数々にして、したため参らせよ」と仰せつつ、惟光うけたまはりて、「子の子は、幾つか仕うまつるべく候ふやらん」と、問ひ申ししかば、源氏、「三つが一つにてあらんかし」とのたまへば、心得て立ちぬ。君、物馴れのさまやと、惟光を、心まさりしておぼしめしぬ。

この巻、けしからぬ秘事といへども、しるす。この心は、新枕は、戌の日、次の夜は亥の日にて、三日の夜が子の日にあたれり。大方、男女、あひそめて三日の夜は、分々に従ひて、祝ひ侍れば、御祝ひあるべきに、葵の上

かくれ給ひて帰り給ふ折節なれば、ことごとしく人の思ふべきを憚りて、ことさらばかりの儀にて、惟光に、忍びやかにのたまへり。(飯の儀にて惟光に忍びやかにのたまへり)。それを心得て、何と問ひたてまつるべきならねば、子のこと、問ひたてまつる。

三つが一つとは、三杯を一膳に据ゑて、鶴に箸をくはへさせて致すものなれば、けしきばかり「三つが一つにてあらんかし」と、のたまへり。おもしろかりし心のうちどもなり。次の夜、したてて持ちて参りて、少納言の乳母と聞こえしは、紫の上の御乳母なり、それは、おとなしく、恥づかしくやおぼしめすべき、と思ひ、むすめの弁の君といふを呼びて、参らせたり。次の朝取り出す折こそ、御乳母など知り、御心ざしの色を、あはれにもめで思ひければ、

○三つが一つ ○三日の夜の餅

○亥の子 ○子の子 ○新枕

これらは、契り初めしなどいふ句に付くべし。紫の上、御年十五、ころは十月、源氏の君は二十二と、よく心得べし。

七 賢木

源氏二十二歳の九月より二十四歳の夏までの事あり。

この巻を賢木といふことは、歌に、
神垣はしるしの杉もなきものを

いかにまがへて折れる榊ぞ

心は、葵の巻に聞こえつる、六条の御息所の御むすめの齋宮の、伊勢へ下着に、まつ清まはりして、野の宮に着き給ふ所へ、さすが忘れも果てず、憂きながら伊勢まで下り給ふ名残も惜しくおぼして、ころは九月十六日の夕月夜、はなやかにさし出でて、よろづ物あはれにおぼしめし出でて、網代の車の忍びやかなるに、うちやつれたるさまにて、かの野の宮へ、源氏、参り給ひたれば、田舎めきたる柴垣を大垣にして、黒木の鳥居、神さびて、浅茅が原も、枯れ枯れに吹きしをれたる秋風、身にしみて、虫の声にまがひたる物の音、絶え絶え聞こえて、火焼屋ばかり、かすかにして、人住みたるけしきもせず。ここに、物思はしき人の住みて、思ひ残すことなくおはすらんと、よそにて思ひやりしよりは、あはれにて、こ

のほどの、と絶えを、われながら恨めしくおぼして、御前の榊を、いささか折らせ給ひて、御簾の内へさし入れて、物語などし給ひし折の歌なり。

さて、たまさかの御物語に、
暁 近くなりしかば、帰
り給ふ。

- 夕月夜
- 柴垣
- 黒木の鳥居
- 野の宮
- 松虫
- 浅茅が原
- 暁の別れ
- 虫の声
- 秋の草さまさま
- 鈴鹿川
- 伊勢まで
- 八十瀬の波

これらの、野の宮、伊勢などに付くべし。いかにも旅の空、物憂き飽かぬ別れの心ねを、伊勢の事に寄せて付くべし。
この巻に、帝、十一月に、かくれさせ給ふ。そのころより、源氏は、事に触れて物憂く、おぼしめして、常にわが殿のうちに、世にもむつかしくなりゆきて、内侍のかみのごとを、この巻にあらはれて、須磨へ、つひに流され給ふ。このこと、この巻にあればとて、伊勢に付くべからず。桐壺のみかどは、いづれの巻に崩御なりけるやらんと、人の尋ねんに、知らざれば、むげに侍る間、

しるすなり。

八 花散里

この巻を花散る里といふことは、歌に、
橘の香をなつかしみほととぎす

花散る里を尋ねてぞとふ

源氏、中川のわたりへ忍びておはしまししに、道にて、御覧じ知りたる所ありける。さて、この歌をよみて、入り給ひしなり。

- 五月雨の空に語らふ声
- 橘
- 宿の垣根

これらは、五月雨のころの事なり。ほととぎすにも、橘にも、付くべし。

九 須磨

源氏二十五の三月より二十六歳まで、この巻に見えたり。

これは、源氏の御兄朱雀院の御位の時、花の宴にあひ初めし臙、月夜の内侍のこと、帝さしも時めかせ給ふ、

内侍のかみのごと聞こえて、内侍の御母太后の腹立ち給ひて、須磨へ流し給ふによりて、須磨とはいふなり。ころは、三月二十四日なり。

- 形見のかがみ
- 面瘦せたる
- 柱隠れのおもかげ
- あかつきかけて出づる月
- 去らぬ鏡

これらは、須磨へおもむき給ふ時、紫の上に名残を惜しみ給ひし折のことは、この名残、さこそおはしけれ。幼くより生ふし立てて、父母になりてもてなし、そこはくの中に心ざし並ぶ方なくおぼして、近ごろは、かりそめの夜離れだにもなかりしに、いつの月日を限るべき御別れならねば、せん方なく思ひ沈み給ふに、御鏡台に寄りゐて、鬢かき給ふとて、このころの思ひに、面瘦せ給へば、われながら、なのめならずうつくしくおぼえて、「この影のさまにや侍る」とて、源氏、よみ給ふ。身はかくてさすらひぬとも君があたり

御返し、
去らぬ鏡の影は離れじ
別れても影だにとまるものならば

鏡を見ても慰みてまし
と、よみかはし給ひしなり。

形見の鏡、須磨の別れ、などに付くべし。須磨の巻に、
墓参りといふことを、人の尋ねることあらば、あらがふ
べからず。源氏、流され給ふ御暇乞ひに、院の御墓へ北
山へ参り給ふ。父帝の御墓なり。

さて、須磨へ移ろひ給ひては、都にひきかへて、かす
かなる御住まひ、おしはかるべし。所は、行平の中納言
の、この浦に流されて、藻塩垂れつとよみけん所、近
きほどなり。波こもとに立ち来る心地して、せん方な
く、あはれなり。心地落ちるて、かりそめの家居なれど、
あたりをかしくとりつくるはせ、松の柱、竹の簀垣、石
階、さま変はりて、なかなかおもしろし。庭の草、立石、
桜など掘り植えて、時のほどに見どころありて、しなさ
せ給ふ。

○若木の桜 ○庭の遣水 ○庭の草
○松の柱 ○石の階 ○竹の垣
これは、須磨の家居の仕儀なり。又、須磨に、柴とい
ふことは、おはします後ろの山に立つ煙を、何ぞと尋ね

させ給へば、柴といふ物、折りくぶるなり。御覧じなれ
ず、めづらかにおぼえて、

山里の庵に焚けるしばしばも
こととひこなん恋ふる里人

と、あそばし給ふ。藻塩焼く煙にまがふなど、付くべし。
やうやう長雨のころになる。これぞ、須磨の長雨といふ
ことなり。心得べし。かやうにとり集めて、京へ使ひを
出し立てて、上せ給ふ。所々の御返し見給ふにも、いか
ばかりか、涙のもよほしになりけん。これらは、ことば
に書き尽くしがたし。

さて、秋にもなりぬ。さらでだに、秋は物のあはれな
るに、心を須磨の旅寝の床、思ひやらるるも露けし。秋
は、心のしをるるに、ひとり目を覚ましつと、四方の風
を聞きしにも、波こもとに立ち来る心地す。行平の中
納言の、関吹き越ゆると詠めけんも、おぼしめし合はせ
て、涙落つともおぼえねど、枕浮くばかりなり。都よ
り持ち給ひし琴を引き寄せて、心のままに、ひきすまし
給ふに、われながら、すこく、おもしろし。

○友千鳥 ○寝覚めの床

○四方の風 ○浦波 ○立ち来る波
○涙に浮く枕 ○月の顔

これは、皆、須磨の憂き住まひの仕儀なり。須磨には、
いかにも、都恋ふる風情、憂き名立ちし、などいふこと
を付くべし。

賢木の巻に伊勢へ下り給ひし御息所より、かくて源氏
のおはします御とぶらひに、御使ひあり。これは、伊勢
より須磨への御使ひ文などとして、須磨に、なべて人のい
ふことなり。

○陸奥の紙五六枚 ○潮干潟
○言ふかひなきわが身 ○浮海布刈これは御息所の地にありし歌ことばなり
○伊勢をの海人 ○思ひやれこれは御息所の地にありし歌ことばなり

かくて、その年も暮れぬ。次の年の春のころ、かくれ
給ひし葵の上の兄、頭の中將、源氏須磨へ移され給ひし
よりは、朝夕恋ひ悲しびて、かかる世のそしりをも知ら
ず、深き罪にあたるとても、いかがせん、と思ひて、忍
びて須磨へおはして、一夜とまりて、詩、聯句、歌よみ
などして、帰り給ふ。源氏、えならず、なつかしく、め
づらかにて、形見にとて、黒き狛笛など、奉り給ふ。

○雲居にひとり ○黒き狛笛 ○同じ涙
○涙そそく ○花の盃

これらは、頭の中將のおはしたる時のことどもなり。
涙などと風情を尽くし、あはれにありがたき心ざしには、
これを申すなり。

かくて、その年三月一日、巳の日の祓、給はんとて、
源氏、海面に出で給ひたれば、にはかに雨風たちて、海
の面は、雲を張りたるがごとし。

○脇笠笠もとりあへず ○人形巳の目のにん
○巳の日の祓 ○大海の原

さて、やうやうして旅の御所へ帰り給ひたれば、雨風
止まず、雷ひらめきて、恐ろしきこと限りなし。日数
を経て降りければ、都より所々の御使ひ参りけり。ぬれ
そばちて、下る使ひ、などといふことあるべし。その時
紫・の上の歌に、

浦風やいかに吹くらん思ひやる
袖うちぬらし波間なきころ

と、よみ給ひしなり。所々よりありしかども、長々しく
て書かず。一日より十三日までは、小止みなく降りて、

十三日の暁、おはしますす郎(らん)に雷(かみ)落ちかかり、あさましなどと言ふばかりなし。その時、住吉の神を深く祈念して、御心のうちに願(ねが)などありしやらん、雨風静まり、雲消えて、空もみどりの色になりしかば、少しまどろみ給ひたる御夢に、告(つ)げあり。故院、御手をとりて、「この浦を去り給へ」と、のたまひしなり。さて、夢といふこと付くべし。

十 明石

源氏二十六歳の三月より二十七歳の七月までなり。

これも、この巻に、源氏、須磨より明石の浦へ、浦伝(うらでん)ひし給へば、明石の巻といふべし。かの十三日の暁に、沖の方を、夢さめて後、御覧じやりたれば、小さき舟に乗りて、播磨の前の国司新発意(しんぱつい)明石の入道(みいし)かの人のもとより案内申して、源氏をよびたてまつりて、御迎へに、舟を奉る。この君、夢現(ゆめげん)おぼしめし合はせて、左右なく、かの浦へ移ろひ給ひ、入道、喜びかしこまりて、限りなく齋(い)きたてまつる。

○迎ひの舟 ○這ひわたるほど ○船出

いでを待ちけるに、いとほるけき心地せしある夜、源氏、都の事、二条の院の紫の上よりはじめて、数々おぼしめし出でて、物あはれなれば、琴をひき給ふ。入道堪へかね、みづから箏(そう)の琴(こと)を持ちて参り、勧めたてまつる。少しひきすさび給ひて、「これは女房のひきたるこそ似つかはしけれ」と、のたまひしを、ことばのたよりにして、言ひ寄る。たとへば、このむすめ、琵琶(ひば)、箏(そう)の琴(こと)など、たぐひなくひきければ、ゆかしくおぼしめして、常に文など通ふ。

○胡桃色(くるみいろ) 料紙の色なり ○濃墨(のうぼく) 薄墨(はくぼく)
○霞(かすみ)めし宿(しゆく) ○遠近(とんじん)
○岡辺野(おかべの) 宿などといふこと、明石と

岡辺の宿は、入道の、むすめを住ませし所なり。親のもとより、ちとひき隔(か)ておきたり。

さて、とかく言ひ寄りて、つひに通はせ給ふ。馬にて通はせ給ふ。ある夜、都恋しくおぼして、

秋の夜の月毛の駒よわが恋ふる

雲居(くもい)に翔(と)れ時の間も見ん

と、よみ給ひしなり。さてこそ、月毛の駒など、明石に

○浦伝ひ ○浦より遠方

これは、明石へ渡り給ひしこと。かくて、都の御住まひにも、やうやうたちまさりて、かがやくほどなり。泉水(いずみ)、立石(たちいし)、遣水(ついでみづ)、目も驚くばかりなり。故郷の池水(いけみづ)もかけ見ゆる、などいふことはもあり。ことによりて付くべし。これは三月なり。

ほどなく四月になり、衣更(えさら)への御装束(ぎようさく)、御帳(ごちやう)の帷子(ゐすぢ)、壁代(かきしろ)まで、改めて、まばゆきほどに、もてなしかしづきたてまつる。この入道、いみじくかしづくむすめ、一人もちたり。これぞ、若紫の巻に、わらは病みの折、北山にて人々語り出でしむすめなり。常に思ひ子、ひとり子などと付くるは、これなり。なべてならず思ひかしづきて、なべてならん婿(むこ)をばとらじ、と思ふに、かの源氏、須磨の浦に沈み給ふを聞きて、いかにしてか、ここともとに移したてまつりて、婿にとりたてまつらん、と思ふ心をや、住吉の神の、あはれとおぼし給ひけん。年月、住吉に祈りきこえき。須磨にて、源氏御覧じける御夢と同じさまに、かの入道も夢を見て、とりあへず御迎へを参らせけり。されども、いかにしてか言ひ出すべきと、つ

付くべし。明石に車などいふことありと、人言ふとも、あらがふべからず。田舎(いなか)なれば、あらじ、と思ふべからず。入道、車造りおきて、持ちたるといふ。

このむすめは、六月のころより、ただならずなりたりしを、御覧じおきて、八月に都へ召し返され給ふ。この浦には、三月より次の年の八月までおはしまし、須磨、明石の二浦(ふたうら)に、三年住ませ給ふなり。三年の別れとは、これなり。旅(たび)ともいふべし。

かくて、源氏、都へ上り給ふに、都の別れにも、いたく劣らずおぼしめして、
都出(みやで)でし春のなごりに劣らぬや

年経る浦を別れぬる秋

と、よみ給ひて、泣く泣く都へ帰り上り給ふ。かのむすめの心中、思ひやるべし。入道も、御なごりを惜しみたてまつりて、境(さかい)まで御送りに参り、源氏も、かたがた、あはれに見すてがたく、都の別れにも劣らずなどや、心から物思はんと、身を恨めしくおぼしたり。

さて、明石の上の御腹(ごはら)に、姫君出で来給ふ。松風の巻に、三つにて京へ迎へ取らせ給ひて、紫の上の御子にし

源氏小鏡 中

十一 濤標

源氏二十歳の十月より
二十八の八月までの事なり。

て、東宮の女御に参らせ給ふ。明石の中宮とは、このこととなり。明石に間は語りといふこと、これも、明石の上を憂き旅の住まひにもち給へるを、いかに都に思はずに聞き給はん、とおぼして、人の口より洩れぬ先にとおぼしめして、紫の上の御もとへ、「思ひよらぬ夢をこそ見て侍れ。うらなき間は語り許し給へ」とのたまひて、歌に、

しほしほと先づぞ泣かるるかりそめの

みるめは海人のすさびなれども

と、よみて、送り給ひしなり。あはれなりし御心ばせな

この巻を身をつくしといふことは、歌に、
数ならでなにはのことも効なきに

なに身を尽くし思ひそめけん

この歌ゆゑに、源氏、都へ召し返されて、ほどなく、もとの位に改まり、数の外の権大納言になり、内大臣をかけ給ふ。いみじく栄え給ふほどに、須磨にて雷落ちかかり、夢のさとしもさまざま、住吉の神の御誓ひとおぼしめして、秋のころ、住吉へ参り給ふに、かの明石の上も、春秋ごとに、幼くより、親出したてて、住吉へ参らするに、都より、よそほしきひびきにて参り給ふをも知らず、明石より参りたれば、松原に車立て続けて、いみじきさまなれば、誰参り給へるにやと、やすらひて、難波に舟さし止めて、問はせられたれば、内の大臣まるり給へ

ならびに 関屋

源氏二十七八の
ころなるべし。

る、と言へば、異人よりはなつかしく、数ならぬ身はと思ひて、難波の祓ばかりにて、帰りなんとするに、忍びやかに、人知らせければ、例の御心知りの惟光、御車近く参りて、かくと申しければ、「わびぬれば」と口ずさび給ふ。この心は本歌に、

わびぬれば今はた同じ難波なる

身をつくしてもあはんとぞ思ふ

といふ心を、のたまひしかば、御用もやとて舟に用意して持ちたりつる、短き筆、硯を出して、御車の内へ奉り、畳紙に、

身をつくし恋ふるしるしにここまでも

めぐりあひぬる縁に・は深しな

と、よみて、舟につかはす。されば、みをつくしには、

○住吉 ○めぐりあふ ○難波の舟

などいふことを、ほんと付くべし。

さて、この巻に、明石の上、姫君生みたてまつり給へば、京より御乳母・下さる。

○岩の生ひ先 ○五十日 ○時ぞともなき蔭

これらは、姫君の生まれ給ひし時分と心得べし。

源氏、近江の国、石山寺へ参り給ふに、石山にて、昔かの空蟬と聞こえし人の夫、伊予の介、常陸の国司になりて下りしが、代はりて後、都へ上るに、石山にてあひ給ひしかば、人知れず、昔のことおぼしめし出でて、忍びて、昔の御心知りの小君を召して、御文あり。

○関屋 ○清水 ○行きあふ路
○潮ならぬ海 ○せきとめがたき涙

その・をりの歌のことばなり。それに取り合はせて、石山、関山などに付くべし。

わくらばに行きあふ路を頼みしに

なほかひなしや潮ならぬ海

行くと来とせきとめがたき涙をや

絶えぬ清水と人は見るらん

源氏は参り給ふ、空蟬は都へ入りぬれば、行くと来との心なり。わくらばとは、たまたまの心なるべし。これらは、逢坂山などと付くべし。

ならびに蓬生

源氏二十八の事なり。

この巻を蓬生といふことは、第三の若紫のならびに末摘む花の巻に見えし、みめわろく、鼻の先赤き女王の、例しなかりしは、常陸の宮の御むすめぞかし。源氏、あはれみて、しばしば立ち寄せ給ひしかども、須磨、明石に御たがひめなどには、おぼしめしも、かずまへさせ給はず。されども、父宮の御あとを離れ果てじと、御心を立てて、いふ限りなくかすかなる御住まひにて、住み給ひしを、明石より上り給ひて、花散る里の御方へ、五月ばかりのころ、渡り給ふに、五月の露深く、蓬、葎しげき家あり。これなん常陸の宮、と御供の人申す。まことにおぼしめし出でて、分け入り給ふに、しきりに露かければ、御笠をさしかけて、御供の人の馬の鞭して、扨ひて入らせ給ひて、それより、あはれびて、庭の草をも引きのけ、所々つくろはせなどして、二三年ありて、二条の院の東の対に、移し参らせて、扶持し給ひしなり。すべて、御心かたくなに、さるは、さし出ではみ、かた

はらいたきこと多かりし人なり。その折の歌に、尋ねてもわれこそ訪はめ道もなく

深き蓬のもとをの心を

蓬生には、

○馬・○鞭・○笠

○荒れたる宿

○狐のすみか

などといふこと、付くべし。木魂も住みぬべし、などといふことあり。蓬、末摘む、などに、鬘といふこと、人言ひ出したらば、心得べし。

末摘む花の乳母・なりしが、侍従とて、末摘む花にはまさりて、源氏などの御文の御返事をもし、ちと人がましきがありしを、末摘むの親しかりし人、筑紫の大貳になりて下りし折、乞ひたてまつりて下りしも、侍従もたとへ・なき御ありさまなれば、「誘ふ水あらば」と思ひしほどに、姫君をば、うち捨てたてまつりて下るに、姫君、わが御髪の落ちにて、鬘をして持ち給へるを、いとうつくしく、九尺ばかりなんありけるを、形見に見よとて、侍従に賜ひしなり。

十二 絵合

源氏三十歳の事なり。

そのころ、帝は、源氏、藤壺の宮の御腹に忍び給ふ宮にて、殊の外に御いとほしみにておはしまししかば、御位に即かせ給ふ。かの朱雀院には、おとなしき宮もおはしまさず。東宮・ばかりぞ、いと幼くおはしまし。

この御代には、源氏、よろづを、はからひたてまつり給ふ。昔の葵の上の御父左大臣殿、撰政させ給ふ。何事も御心のままにて、めでたし。御孫の姫君、弘徽殿に侍はせ給ふ。又、源氏の通ひ給ふ伊勢の御息所の御腹、齋宮に立ち給ひしも、おりさせ給ひて、源氏、この齋宮を御子にしたてまつりて、内へ参らせ給ふ。とりどりの御おぼえにて、梅壺と申し、後には後に立たせ給ふ。

帝、よろづのことよりも、絵合せを好ませ給へば、方方より集めて、参らせ給ふ。ころは三月十日なれば、大方の空もおもしろきころ、弘徽殿と梅壺と、左右を分ちて御絵合せあり。帝・御覧あり。清涼殿の広廊に、御座よせ給ひ、内の御方渡らせ給ふ。女御た

ちの御代官には、女房を三人づつ出されたり。心ことに装束きて侍ひし兵部卿の宮、上野の御子などの判し給ふ。口々に挑みしに、左、梅壺なれば、源氏の御方より、須磨、明石の二つの絵を取り出されたり。これによりて、左勝ち給ふ。さてこそ、絵合せとは名づけたり。

この須磨、明石の絵は、源氏、須磨におはしまし折、たとへなき御つれづれの限りに、色々の紙に、浦のけしき、山のたたずまひを、心のゆくゆく書きすまし給へり。それに、わが御ありさまを書き給へば、いかでか、おろかならん。たとへん方なし。これを心得て付くべし。この絵をば、源氏、秘し給ひて、都へ持ちて上り給へども、紫の上にも語り給はず。いはんや、見せ給はざりしを、この御時の興に出され給ひければ、紫の上の三つの恨みといふことの、その一つに、この絵合せのこと入りたり。

十三 松風

源氏三十歳の時なり。

源氏、明石にて御心ざし浅からず、入道のむすめにお

ぼしめして、ただならざりしを、御覽じ捨てて、都へ上

身を変へてひとり帰れるふるさとに

らせ給ひしを、姫君生みたてまつり、とかく月日を過

この歌ゆゑに、この巻の名を松風とはいふなり。

して、三つになり給ふあまり、国境隔たりて、おぼつ

○都帰り ○形見の琴

かなく、恋しくおぼしめして、かの浦へ、「上り給へ」と

○松風 ○大井川

のたまひしかば、おほざうの住まひ、先づしばしは、む

つかし、とて、かの明石の上の母、入道の北の方、大井

そのころ、源氏、桂に御堂をいかめしく建て、月に二

川のわたりを、知る所に持ちたれば、そのあたりの者ど

たび、念仏などの為におはしけるついでに、かの大井へ

も、呼びくだして、古き家など修理せさせて、上りて住

も渡らせ給へば、月に二たびの御契りなり。明石の上は、

み給ふ。年ごろの夫をば、この浦に捨て、むすめを連れ

大井に住み給ひしなり。桂のついでに、源氏渡り給ふを、

て上る。心のうち、思ひやるべし。

皆人、桂に住むと心得たる、よくよく心得分けて、付け

入道は、北の方にも、むすめにも、離れたてまつる。

させ給ふべし。月に二たびの契りなどは、

わが身、年よりたれば、いつの世にか、あひ見たてまつ

○大井 ○桂

るべきに、名残の悲しさ、たとへん方なし。されども、

に付くべし。姫君、三つにて上り給へば、

都へ上り給へば、めでたくも思ふらんかし。

○蛭子の年 ○浦の名残

さて、大井に着きたれば、大井のわたりなれば、河波

大井に付くべし。この巻に、小鷹狩といふことあるべし。

すこく、松風すこく吹き払ひて、故郷としもおぼえず、

秋のころ、源氏、桂へまうで給ひて、例のごとく大井に

さびしくあはれなれば、明石を源氏出で給ひし折、都よ

おはしける折にか、殿上人、公達、あまた、小鷹狩のつ

り持たせ給へりし琴を、あふまでの御形見とて置き給へ

り。それを、明石の上、取り出して、

いにて参りたれば、御酒など参りて、おもしろきあたり

のうち、思ひやるべし。大方の世のはかなさをだにも、

なれば、小鷹狩して、小鳥どもを木の枝につけたり、と

御心に深くおぼしめし嘆かせ給ふ心なれば、まして、忘

あるを、うるはしき萩と心得べからず。二木の枝小さき

れぬ昔の御心尽くし、今は憂き世の名残・だにもなき心

と、心得べし。これら、桂、大井に付くべし。

地して、人目には大方のことにて、御心のうちは思ひや

十四 薄雲

源氏三十の冬より三十二歳の秋まで
なり。薄雲の女院とは、藤壺の御事
なり。輝く日の宮と聞こえしは、源
氏の継母、忍びて参り給ふ人なり。

この巻を薄雲といふことは、薄雲の女院かくれさせ給
ひて後、源氏、

入り日さす峰にただよふ薄雲は
物思ふ袖の色にまがへる

この歌の心は、輝く日の宮と聞こえし藤壺の宮、その
ころの主上は、源氏、忍びてこの御腹にまうけ給ひし御
子なれども、故院、夢にも知り給はず、殊の外御いとほ
しみにて、御年十一にて、身をつくししの巻に、御位に即
かせ給ふ。御母、輝く日の宮も、中宮より女院の宣旨を
かうぶらせ給ひて、めでたし。御年三十七にて、かくれ
させ給ふ。ころは三月なり。天下諒闇なり。帝をはじ
めたてまつりて、嘆きの色深し。とりわき、源氏の御心

の袖の色、かがやく、光隠るる、などと付くべし。
天下に、さとし繁く、月日のけしき、雲のたたずまひ
までも、不思議なることありしほどに、おほやけも、お
ぼし嘆かせ給ひて、御祈りどもありしに、この女院の御
をぢにておはします僧都の、おほやけの御持僧にて、夜
居に参り給ひしが、人聞かぬ間に、かの源氏の君の御子
にておはします、一切のこと、親の恩より起こることな
れば、親を知ろしめさで御覽じくだせば、かやうに天下
穢かならず、と申し聞かせられけるによりて、帝、大き
に驚きおぼしめして、その色を源氏にも申されて、「ただ
御位に即き給へ」と、仰せられしかども、「いかが、さる

こと侍らん」と、のたまひて、たがひに心のうちには心得給ひて、後、御世もしづまりける。その御心のとほりにて、この御代に、源氏三十九の御年、藤の裏葉の巻に、院号をかうぶらせ給ひて、六条の院とぞ申しける。

十五 槿

源氏三十一歳なり。

この巻を槿といふことは、式部卿の宮の姫君、賀茂の齋にておはしまししが、この齋院を深く心にかけてしなり、つひに下り居させ給ひて、前の齋院と申す。かの御方への御歌に、見し折の露忘れぬあさがほも

花の盛りは過ぎやしぬらん

この歌ゆゑに、巻を槿とはいふなり。

この齋院、賀茂の齋にておはしましし、神の齋垣の内にて、御心にかけて申し通はせ給へども、折節の情しき御返事などにて、憎からぬやうに聞こえさせ給へども、つひに心強くて止み給ふ。下り居になりては、御をば桃園の宮に、一所に住み給ひしなり。これは、槿、桃園など、心得べし。心強きゆゑの、あやにくにや、源氏、

殊の外におりたち申し給ひしかども、心強くて、後には、つひに御髪おろし給ふ。心強くやさしき例に付くべし。

十六 少女

源氏三十二の三月より三十四の十月までなるべし。

この巻を少女といふことは、賀茂の臨時の祭といふことを、内裏にてつとめさせ給ふに、ころは十一月なり。二十より内内の女をそろへて、天人の姿に出でたせ、舞姫とて、内裏へ、天下一の人などの方より参らせらる。

源氏つとめさせ給ふ。御乳母の子惟光がむすめを、出し、たてて、参らせ給ふに、忍びてのぞき御覧じて、昔源氏の若くおはせし折参りし少女をしのびおぼしめし出でて、それも、いまだ忘れがたくおぼしめす人あり。それをおぼしめし出でて、それも今は年ふりぬらん、われも御年ふりぬ、とおぼしめして、よみ給ひし御歌、

少女子が神さびぬらん天つ袖

ふるき世の友よはひ経ぬれば

さて、惟光がむすめは、そのまま、内裏に、藤内侍のすけとて、さぶらはせらる。これぞ、源氏の御子、葵の

上の御腹の若君 後には夕霧の左大臣 この巻より時々見なれ給ひて、あまたの御子ども生みたてまつりし人なり。 少女、神の神

例か、この巻に、夕霧の大将、十二にて元服、そのころ 神の神

の内大臣の御むすめ、十四ばかりになり給ふを、祖母の をち

大宮のもとに生ひ立ち給ふを、幼き心に深く心かけて、 をち

恋ひしのび給ふほどに、姫君も、諸恋なり。御父、聞き をち

つけ給ひて、あやなく引きのけて、姫君をば、わが御も をち

とへよびとり給ふ。姫君、心苦しくおぼして、ある夜の をち

寝覚めに、「雲居の雁もわがごと・や」と、忍びやかに詠 をち

じ給ふを、夕霧の大将立ち聞きて、いとど思ひのまさり をち

しなり。 給ひてめでたかりし事もなり 幼きほどの心なるべし。いとこなどといふこと、付くべし。又、この人のこと、六位宿世といふことの侍りし、何事ぞとあらがふべからず。この人の、ある時、いかなる暇にか、一所にて物語し給ふを、雲居の雁の乳母、腹立ちて、夕霧、そのころいまだ六位にておはしけるほど

に、この姫君をば、東宮に参り給はんと、かしづき給ふことなれば、「なぞや、まだしきに六位宿世」と、腹立ちしなり。

これ、ことによりて付くべし。これには、いかにも成りあがりてみたき心ねを付くべし。かへすがへす、夕霧の大将の北の方をば、雲居の雁と心得べし。夕霧に付けん、似つかはしかるべし。秋なり。

また、この巻に、源氏の大臣、六条京極わたりに、四町を占めて、殿造りし、方々の女房たち、渡しきこえ給ふ。心々、好みに庭を造らせたる。

まづ、南の町には、紫の上、春のあけぼのをしめて、春の草木を植ゑらるる。さてこそ、春の御方とも、物語のおもてには、申したりしなり。

又、花散る里と聞こえしは、夏の御方にて、卯の花、薔薇、牡丹、藤、つつじ、など、植ゑたり。花散る里によそへて、おもしろかるべし。

梅壺の女御と申すは、六条の御息所の御むすめ、源氏の御養ひの御むすめなれば、西の対に住み給ふ。これは、内より出で給ふ御里の御ためなり。この女御の君、秋の

田をしめ給へば、秋の野をはるかに移し植ゑて、木高き紅葉色を増し、ことにおもしろし。そのころの折にあはせて、いと興を増したる。

又、北の町には、明石の御方、桂におはしまししを、移ろはせ給ふ。北なれば、冬のけしきを移して、冬枯れの野べのけしき、五葉の松の雪の朝には、まことに簾もあげぬべし。ことにすごく、おもしろし。かやうのこと、よくよさるほどに、かた方々、殿移りめでたくして、秋好む女御の御方、そのころ、折にあひたれば、ことにおもしろきに、かの女御の御方より、紅葉を箱の蓋に入れて、上重の、いともてつけて、きよらなるを、御使ひにて、紫の上、春の御方へ、御歌あり。

心から春待つ園はわが宿の

紅葉を風のつてにても見よ

風のためよりの紅葉などいふことあるべし

その次の春、又、紫の上の御方より、かの女御の秋の御方へ、去年の紅葉の御返しに、これも、花を岩根の松などにとり具して、去年のごとく、童なまはして御使ひあり。

花園の胡蝶をさへや下草の

秋まつ虫は疎くなるらん

と、のたまひ送りしかば、いとおもしろき御心どもならんかし。かやうのことは、少女の巻に見えたることなれば、同じ所に書く。雲居の雁、又は少女などにつくべからず。よく心得させ給ふべし。この花、紅葉、殿移りの庭のけしきなどは、四季の心にてかと、おぼえたり。

十七 玉鬘

源氏三十五の三月より同じき十二月までなり。

この巻を玉鬘といふことは、歌にあり。玉鬘の姫君、筑紫より上りたりしを、右近、初瀬にて迎へとり、もてなしかしづき給ふを、紫の上、いかなる筋の心ねにてかと疑ひて、よみ給ひし歌に、

恋ひわたる身はそれならで玉かづら

いかなる筋を尋ね来ぬらん

さて、この歌ゆゑに、女を、玉鬘の君といふ。又、巻をもいふなり。母夕顔の上には、はかなく後れしこと、年は経れども忘れ給はず、さまざま人を見給ふにも、あへなく消え果てし露のよすがの、心にかかり給ひしに、形

見に使ひ給ふ右近ばかりは、さうざうしく悲しくて、いかにしてか、かの物語せし撫子を尋ね出さましと、思ひわたり給ふ。

かの姫君、御年四歳にて、乳母に連れられて、筑紫へ下り給ふ。やうやう、おとなび給ふままに、かたちも、かたじけなく、うつくしく生ひ立ち給ふほどに、乳母、あはれに、いたはしく、もてかしづきたてまつるかひなく、乳母の夫、命いのち尽つきぬ。いふかひなくして、乳母、はぐくみたてまつるほどに、ならびの国の守護にや、言ひ寄りに、すでに日取りして、婿入りせんとす。これに怖ぢ給ひて、悲しみ給ふほどに、乳母、二三人して、とかくかまへて、京へ上せたてまつる。御年二十三。これを筑紫上りといふかの大夫の少監、追ひ手の船をやたえずらんと、怖ぢて、早船にて、上せたてまつりしなり。これを、筑紫上りの早船といふなり。

二十年 早船 筑紫上り

などといふことを付くべし。

かくてこそ、右近、初瀬にて、参りあひて、源氏に申して、迎へおきたてまつりて、鬚黒の大将の北の方にな

り、内の内侍のかみ、かけ給へば、玉鬘の内侍のかみとは、書きたりけり。初瀬参りのことは、京へ上りて、知る方なく、父の大臣にも、いまだ申さず。又、源氏の大鳥のやうに、悲しさに、仏の御しるべを頼みて、初瀬へ徒歩にて参り、また、右近も参りあひたりしなり。

されば、筑紫上り、初瀬参り、よかるべし。この姫君の幼名、瑠璃君といふ。又、衣くばりといふことは、いづれの巻よりぞ、といふ人あらば、この玉鬘の末にあり。

師走の末に、源氏の御方より、御方々の正月の御装束を、くばらせ給ふ。まづ、紫の上、赤色、御むすめの姫君の御方へは紅梅、玉鬘の御方へは紅、明石の御方へは白き、花散る里へは縹、未摘む花の方へは柳、空蟬の尼のもとへは山梔色、これを衣くばりと心得べし。

この巻にあればとて、筑紫上り、早船、初瀬、などに付くべからず。衣のことをいはんには、玉鬘、紅の色深く、などといふことをば、ことによりて付くべし。この巻ならず、衣の色に、緋、聴色、今様色、などあ

り。けしからぬ秘事・なりと、いひならはしたる。繖とは、水色の生絹なり。かちやうのごとくなれば、かとりといふなり。今様色とは、紅梅をいふなり。聴色とは、今の練絹、紅梅のことなり。四季にしたがひて、名を変へたり。聴色とは、紅梅を、濃き紅より、ちと薄けれど、聴・すといへり。練絹は、いみじく華飾の物なるを、聴すといへり。又、落栗色といふことあり。これ又、秘事なりといふ。これは、紅のことなり。

ならびに 初音

源氏三十六の正月なり。

この巻を初音といふことは、明石の上の歌に、姫君の紫の上の御子になりておはしませば、見たてまつることもなく、恋しく思ひ給ふ。正月一日、かの御方へ、文參らせたり。

年月をまつにひかれてふる人に

今日鶯の初音聞かせよ

五葉の松の枝に、この歌を書きて参らせられたれば、
○五葉の松 ○鬚籠文にそへたり

ならびに 螢

これも源氏三十六歳の五月の事見えたり。

この巻を螢といふこと、歌に、

声はせて身のみ焦がす螢こそ

いふにもまさる思ひなりけれ

この心は、玉鬘の君を迎へとりたてまつりて、かしづき給ふほどに、心にかけて給ふ公達、いと多し。中にも、源氏の御弟、兵部卿の宮、この君を限りなく心にかけて、五月四日の夜、忍びておはしたるに、源氏、すきずきしく、かの女君の、かたちのすぐれておはしますを、宮に見せたてまつりて、いとど御心を尽くさせんとて、その夕つ方、螢を多く取り集めて、几帳の帷子につつみて、光を、さと見せて、ほのかに見せしなり。かの桂の親王に心をかけし女こそ、月の光を待ちかねて、螢を袖につつまけれなどといふ、ふるき例によそへたり。かの桂の親王と聞こえしは、清和天皇の第五の御子、琵琶の上手ぞかし。

これも、桐壺の帝に、第五の皇子と書けり。琵琶ひ

○檜破子これも文にそへたり

などといふことを付くべし。この巻には、かための祝ひの餅、鏡のことあり。紫の上には、源氏見せたてまつらせ給ふなり。その折の歌、付くべし。

薄氷とけぬる池の鏡には

世にくもりなき影ぞならべる

この心、取り合はせて、初春の祝ひなれば、付くべし。

ならびに 胡蝶

これも源氏三十六歳の事なり。

昔は、院の宮、一の人、后なども、四季に御説経とて、いかめしき法会あり仁王経、大般若 秋好む中宮、六条の院にて行なはせ給ふとて、中宮の御方へ花奉らせ給ふとて、鳥、蝶に、童を装束かせて、花瓶に桜、山吹を立てて参らせ給ふ。胡蝶、花園へ舞ひて入ることあり。少女の巻に、「春待つ園」の御返事、「花園の胡蝶をさへや」と申し送り給ひしも、この巻なれば、胡蝶といふ。さて、この巻に、舟遊び、この舟を浮かべて、御樂ありて、御心おもしろかりしことも、これ春なり。

きとあり。おもしろし。これには、几帳の透影の螢、あやめのしろく、螢の影にてほのかに、など付くべし。五月四日、螢の影にてほのかに見し、など付くべし。

ならびに 常夏

源氏の年、前に同じ。

玉鬘の君の住ませ給ふ御方をば、西の対といへり。この御方の庭に、撫子を、唐のも、大和撫子も、ととのへて、植ゑわたされたる。かの尼の物語に、父の大臣、姫君を撫子と語り出したるほどにやと、おもしろく、咲き乱れて、えならぬなり。源氏の大臣をはじめたてまつりて、公達、この方にて、鮎、いしぶし、賀茂川、桂川より奉りたるを、御前にて調じて、参り給ふ。この心も
○近き川 ○桂川
などといふこともあるべし。夏なり。いかにも涼しき所を付くべし。そのほど、撫子といふ。

ならびに 篝火

これも源氏三十六歳なり。

この巻を篝火といふことは、源氏、玉鬘を御子にして、もてなし給ふといへども、まことの御子ならねば、御心のうちに、昔の御形見にも見たてまつらばや、とおぼしめし入りて、夏の夜の、月おそく出づるころ、御前に篝火ともして、御琴など教へさせ給ひける時の歌なり。

篝火に立ち添ふ恋の煙こそ

身よりあまれる思ひなりけれ

と、よみ給ひしほどなり。御琴を枕にして、もろともに添ひ臥し給ひし御歌なり。

○篝火 ○琴を枕 ○夕闇

○恋の煙 ○秋の初風

○思ひかくる ○玉鬘

などといふことあるべし。

ならびに 野分

これも源氏三十六歳の八月の事なり。

八月に大風吹きて、さわがしく、所々の築地、透垣など、総じてすさまじく、恐ろしかりしなり。総じて、秋は風吹くものなり。源氏のことばならねど、秋の大風めきて吹くをば、野分といふ。

さて、源氏の御子夕霧の大将の、いまだ中将にておはしまししころなれば、雲居の雁とよみ給ひける御いとこの姫君を、深く心にかけて、風のまぎれに、御妹の姫君の(明石の上の)御方へ参りて、硯、紙乞ひて、かの雲居の雁へ文つかはす。刈萱に、包み紙の色、紫の薄様なり。

風さわぎ村雲まよふ夕べには

忘る間もなき忘れぬ君

野分といふことあらば、この歌のことばをも、とり添ふべし。

○刈萱 ○紫の薄様 ○乞ひし硯

などいふことあるべし。野分の朝、源氏、所々へ風のとぶらひに、まるら・せ給ひしなり。中にも、明石の御方へおはしまして、大方の風のとぶらひばかりにて、つれなく帰り給ふを、御覽じ送りて、さうさうしくおぼして、琴をほのかにかき鳴らして、明石の御方の歌、

大方の萩の葉過ぐる風の音も

わが身一つにしむ心地して

○野分の朝 ○風のとぶらひ

○萩の葉過ぐる風

など付くべし。野分に村雨降りたる心得べし、などいふことあらば、あしかるべし。

ならびに 行幸

源氏三十六歳の十二月より三十七の三月までなり。

主上は、かの源氏の忍びの御子、冷泉院にておはしましき。ころは十二月なり。大原野へ行幸し給ひしなり。鷹狩なれば、そのことば、

○御幸 ○小塩山 ○雪

○雉 ○古き跡 ○藤袴

その時、源氏の大臣は、行幸の御供し給はず。

ならびに 藤袴

この巻、藤袴といふこと、夕霧の大将の御歌に、玉鬘

の内侍のかみ、鬘黒の御許へ移り給ひて、西の対におはしまし折、

同じ野の露にやつる藤袴

あはれはかけよ託言ばかりも

そのころの撰政関白の母宮は、桐壺の帝の御妹、源氏にも御をば、夕霧の御ためには御祖母なり。この玉鬘の姫君にも御祖母ぞかし。この宮、かくれさせ給へば、中将も、この姫君も、服とて、黒き衣を着給へり。そのころ、御服過ぐしては、内の内侍のかみに参り給ふべきにて、内より御使ひに、かの中将を奉り給ふに、下心ゆかしく思は・ぬにもあらざれば、「内の仰せ・こと啓し侍らん」と言ひなして、蘭の花のおもしろきを御簾の内へさし入れて、これをよみて、御手を、いささか引き動かしたり。この心をよく得て、藤袴といふことあらば付くべし

ならびに 真木柱

源氏三十七歳の十月より三十八の冬までなり。

この巻を真木柱といふことは、この玉鬘の姫君、内の内侍のかみかけて、鬘黒の大将の北の方にな

り給ふを、大殿の移ろはせ給ひしかば、もとの上思ひ出で給ひしに、そのころ十二三になり給ふ姫君、おはしける。出で給ふとて、この歌を書きて、柱の少し割れたる中へ、笄の先して、押し入れ給ふなり。

今はとて宿離れぬとも馴れ来つる

真木の柱はわれを忘るな

紙の色、檜皮色なり。心得べし。さてこそ、真木柱とはいひけれ。

○檜皮の紙 ○真木の柱

などと付くべし。この巻に、火取りの灰といふことあり。これぞ、この巻の名句なり。玉鬘へ鬘黒の大将通ひ給ひしに、もとの北の方は、源氏の大員なべてならず思ひたてまつり給ふ紫の上には、別腹の御姉、式部卿の宮の大姫君にて、世のおぼえ重りかに、あなづりにくき・御事にて、御子どもあまたおはしましければ、大将も、なべてならず思ひながら、年月、物のけにわづらひて、一年は、心現ならずおはしけるほどに、何となく、さやうの方より、御中も、あ・かるるやうなるに、この玉鬘に通ひては、又、をとこの御心いかならん、移ろひ果てて、

安き御心もなく、北の御方、いとのだやかにて、わが御身のほど、心得果てさせ給ひて、もろともに出したてなどしてやり給ひしが、例の物のけのわざになや、大きな火取りに火を取りて、匂ひして出でなんと、ほのめき給ふ折、北の方、さらぬさまにて起き出でて、火取りを投げかけさせ給ふほどに、灰も立ち満ち、御衣も焼け焦がれなどせしなり。それより、いと疎ましくなりもてゆく。つひには、かくれ給ふ。

○火取りの灰 ○物のけ ○疎む

又、大将を鬘黒といふ異名は、御鬘の黒くおはしましめて、見さま、源氏などのごとくうつくしくはあらざりけめど、おしなべてはあらず。おだしく世の下かたにて、めやすしかし。後には、閑白にて、内侍のかみ、北の政所かけて、いみじく栄え給ひし御事なり。柏木の右衛門の督、いまだ頭の中將と聞こえしころ、玉鬘の内侍を、わが御妹とも知らずして、心にかけて、歌に、

思ふとも君は知らじなわきかへり

岩もる水の色し見えねば

さてこそ、この右衛門の督をば、岩もる中將といひし

なり。かやうのこと、人いひ待るとも、あらがふべからず。柏木と玉鬘とは、弟兄にておはしますを、知らで言ひわたりしなり。

十八 梅枝

源氏三十九歳の正月なり。帝は十三歳。姫君は十二歳のことなり。

陸月のつごもりのころ、源氏の大将、六条の院にて、薫物合せあり。これは、明石の上の御むすめ、東宮に参り給ふ御いそぎなり。香ども、御方々へくばりて、挑み合はせ給ふ。前の齋院と申すは、かの権の齋院、源氏に心強くて止み給ひし人なり。この御方より、散り過ぎたる梅の枝に、文つけて、瑠璃の壺に薫物を入れて、五葉の枝につけて、白き壺にも薫物を入れて、梅を彫りて、付けられたり。結びつけたる糸のさま、なよやかに、えならずおもしろくなされたり。その歌、

花の香は散りにし枝に留まらねど

移らん袖に浅く染まめや

やがて、その夜、かの兵部卿の宮を判者にて、御方々の薫物を試みさせ給ふ。

薫物の色々、

梅花・・方 紫の上、合はせ給ふ。

黒方 明石の上、合はせ給ふ。

荷葉・ 花散る里の、合はせ給ふ。

侍従方 源氏の君、合はせ給ふ。

いづれもいづれも、とりどりにおもしろし。中にも、そのころ、梅花、折にあひておもしろしと、定められき。御酒など参りて、宮掃り給ふ。御贈り物に薫物を奉り給へば、宮の御歌に、

梅の香をえならぬ袖に移してもて

ことあやまりと妹やとがめん

この御返事、源氏の御車に奉るほどに、追ひて、

めづらしと故郷人も待ちぞ見ん

花の鏡を着て帰る君

梅が枝、薫物などいふことに、この歌ことばなど、取りて付くべし。薫物に、もしあゆみといふことあらば、何ぞと問ふべからず。これは、遠くまで匂ふ心ななり。薫物を合はせては、夏、冬にはかりて埋むことあり。それも、匂ひにしたがひて、渡殿の下より出づる水にうづ

むあり 内裏に御溝水になすらへて、などといふこともあるべし。香は、梅が枝の巻にあり。薫物も梅花なれば、梅が枝といふ。

十九 藤の裏葉

源氏三十九の三月より十月までなり。

この巻を藤の裏葉といふことは、雲居の雁の姫君を、夕霧の大将、緑の袖の昔より思ひそめて、年を経るに、姫君の父大臣、許し給ひ侍らざりしが、さしてしもあるべきならねば、許し給ひ侍らんの御心にて、大臣の御家に、藤の花ざかりに、中将をよび夕霧のいまだきこえ給ふ。管絃などありて、盃のついでに、大臣、「藤の裏葉」と詠じ給ひしなり。さてたつるこの歌に本歌あり。

春日朝さす藤の裏葉のうらとけて

君し思はばわれも頼まん

相違なく婿にとりて、水漏るまじく、めでたかりし。

後には、三条の上とて、この雲居の雁の御ことなり。御子ども、あまた出で来給ふ。ころは卯月なり。やがて、同じ月に、明石の上の姫君の、春宮に参り給ひて、御局、

昔の桐壺なり。御年十二。昔の更衣の御局なれば、源氏の御相続なり。淑景舎と申しき。御おぼえ、いかでおろかならん。あまたの宮たちの御母、一の宮東宮に立ち給ふ。明石の中宮とは、この御ことなり。

かくて、その年、源氏の大い、御年三十九にて、太上天皇の宣旨をかうぶり給ひし。六条の院と申しき。位を極め給ふ。とてもあるまじき御事ならねども、ただ人になり給ひし後なれば、さしあたりて、珍らかにめでたし。やがて、その秋、六条の院へ、行幸をなしたてまつり給ふ。御子の夕霧は、そのころ宰相なりしを、中納言になさる。いづくにても、藤の裏葉は、源氏行幸よろこびし給ひたる巻なれば、心得べし。

又、行幸の折、おもしろかりしは、そのころの院とは、御兄朱雀院にておはします。主上は、人こそ知らね、六条の院の御子、冷泉院にておはします。御座を、両院のにてあるべきを、卑下して、太政大臣の御座にさせられたるを、院御覧じて、いかがとて、あるじの御座をなほさせ、院の御座と等しくさせられたり。かやうのこと、了見して付くべし。

二十 若菜の上

源氏三十九より四十一までなり。夕霧十九歳なり。

玉鬘の内侍のかみ、鬚黒の大将の北の方にて、いつしか、若君二所まうけたてまつりて、正月二十二日、源氏の院の御方へ、子の日の御祝ひに参り給へば、御遊深く、さまざまめでたかりしに、玉鬘の御歌、

若菜さす野辺の小松を引き連れて

もとの岩根を祈る今日かな

六条の院の御返し、

小松原末のよはひにひかれてや

野辺の若菜も年を積むべき

と、よみかはし給へり。この心は、源氏の御賀の心ねに、かくおはしまして、祝ひ給へり。上臈は、四十の年より、十に満つる年、御賀といひて、いみじき大法会あり。行なひ、舞楽をととのへ、一門一家の一大事に、祈りをすることあり。これによりて、まづ、内侍のかみ、御子に奉るゆゑなれば、子の日によそへて、おはしましたる。

子の日は、正月の子の日は、野辺のあそび、若菜を

供御にそなふることあり。これも、若菜の羹と心得べし。さて、ほど経て、内侍のかみを見てまつり給へば、いとねびまさりて、物々しく見るかひありし御さまと、源氏の、ほめ給へりしなり。

若菜に見るかひありなどといふこと、苦しからじ。

玉鬘なども侍れば、源氏御年四十なれば、四十の春なるといふこと、よし。御賀といふことは、人の命を延ぶることにて、祝ひのことによし。

この巻に、藤の裏葉に、東宮に参り給ひし御むすめ、ただならずおはしまして、若君生みたてまつり給ふ。めでたかりし御ことなり。これを、明石の浦に留まりし入道、聞き伝へて、いかばかり、うれしかりけん。この世の願ひ、今満ちぬれば、深き山にこもるとて、都のむすめのもとへも、北の方の尼君のもとへも、こまごまと文書きて上す。この人々の祈りを、住吉にて立ておきたる文を箱に入れて、封じ籠めて奉る。源氏御覧じてこそ、若菜の住吉参りといふことは侍れ。明石の上をまうけんとして見たりし夢をも書きたる。入道の歌に、

光り出でん暁 近くなりにけり

今ぞ見し・夜の夢語りする

と、夢物語の文に書き添へたれば、いかにも、この心には、夢物語、明石の岩・屋、などといふこともあるべし。そのころ、女三の宮と聞こえしは、朱雀院の姫宮にておはします。あまたの御中に、院の上、限りなくいとほしみおぼしめして、院の御悩みもあつかひ、心苦しくおぼして、六条の院、御年四十の後なり。これぞ、この巻の下に、柏木の衛門の督にうき名立ちて、薫大将を生み給ひし人なり。いつより源氏にはあひ給へる、など問ふ人あらば、若菜の上に、御年十五にて迎へられ給ひしと心得べし。

ならびに 若菜の下

源氏四十より四十五までなり。女三の宮二十歳なり。

これ、若菜の上に、いはれあることなれば、同じことなり。この巻に、源氏、住吉へ参り給ふ。姫君、東宮の若君まうけたてまつる、と言ひつる宮、五つにて東宮に即かせ給ふ。御父の東宮は、位に即かせ給へり。これは、朱雀院の御子にてぞ、おはしましし。さて、何事も、住

小侍従といひし女房は、さるたよりなれば、語らひ寄りて、文をやり、「みかきが原・を分きかねて、風にあたりて、それより心地わびしく」などと書きやる。小侍従、思ひより侍らぬ心地して、「かけかけし」などばかり書きて、返事をやりしなり。走り書きとは、なほざりにて、心にも入らぬ書きなり。かくて、小侍従、責められ困じて、つひに、あはせ給ふ。ころは卯月なり。そのころ、紫の上、悩み給ひて、大事におはしければ、源氏も、ひたすらうち絶えて、この御方におはしませば、よき隙つくりて、あはせ初めしなり。やがて、それより、はらみ給ひて、これを源氏の。ならず悩ませ給へば、紫の上の御ことにさしあはせ、また、いかならんと心苦しくおぼしめして、源氏おはしましたれば、宮は、やうやうそら恐ろしく、悲しく、あひ給ひし。その夜、衛門の督を夢に見たるよし、申し聞かせたれば、まことぞとおぼして、御目も見あはせられずおはしませば、このほどのと絶えを恨み給ふにや、とおぼしめして、慰め給ふほどに、いと暑きころなれば、夕風立ちて紫の御方へ帰り給はんとし給へば、女三の宮、

吉の神のめぐみのありがたくおぼしめして、紫の上、明石の上の母尼上、女御殿など、おぼしめしさまさま、引き連れて参り給ひし。ころは十月二十日、枯れたる萩住吉の枯れ萩、松原にはるばる立ち続けたる車、神宝、これは皆、神祇にて、住吉にて、昔の須磨、明石、難波の方さまを見やりて、心知るとちは思ひ出す。心得て付くべし。

女三の宮を、柏木の衛門の督、見たてまつりて、思ひかけたることは、若菜上の巻に、春の末つ方、六条院にて、かすめる暮れ方の庭にて、御鞠あり。衛門の督も、参り給ふに、宮の飼はせ給ふ猫を、いづくよりか、知らぬ猫追ひて、らうがはしく御簾の内へ入りて騒げば、宮、立ち給へり。猫の綱にて、御簾のあきて、宮の御姿見え給ふ。その折より病となり、あさましかりしことなり。

つひに、身をいたづらになししこと、この宮ゆゑをかし。
○猫の綱引く ○春の夕暮れ
○立ち姿 ○鞠
○母屋の柱 柱に立ち添ひ 給ふことなり
などといふことあるべし。衛門の督、この宮の御乳母、

御名残惜しくやおぼしめしけん、「月待ちてもといふなるもの」とのたまへば、その間にもとやおぼしめすと、いとほしくおぼして、その夜は、とまり給ふ。本歌、夕闇は道たどとし月待ちて

帰れわがせこそその間にも見ん

その夜、とどめたてまつり給はざらんには、このこと顯はれざらましと、いと悲し。さて、朝涼みのほどに帰り給ふに、源氏の、かはほりを、落とさせ給ひて、求めさせ給ふに、御禱の下に、浅緑の薄様に書きたる文あり。あやしきおぼして、御鏡など御覧する所にて御覧すれば、さださだ書きあらはしたる文、まがふべくもあらぬ、恋の苦しきを書きたるなり。源氏の御心のうち、いかばかりかありけむ。小侍従、御鏡など持ちて参りて、見たてまつれば、昨日の、かの御方より参りたりし文の色、御覧すれば、何となく胸ひしひしとなる心地して、源氏帰り給ひて後、宮に問ひたてまつれば、「いざ。見しほどに入り給へば、禰の下に置きたりし」と、のたまへば、見るに、いづれかあらん。かくと申せば、御涙ならでは、かこつ方なし。

。緑の薄様の文。 。梅の下あらはるる
などいふこと付くべし。

それよりぞ、源氏は、人目はかりにて、その後は、つ
ひに、あひ給はず。人知れぬ御心のうち、さこそと、あ
はれにもあさまし。さて、若菜の女樂といふ。これは三の
衛門の督にあは
ざりし前なり朱雀院五十の賀、御子たち、つとめ給ふ。こ
の女三の宮、つとめて参り給ふに、源氏の御もとにおは
しませば、さりとも、琴を習はし給ふらんと、御心事の
あるよし聞き給ひて、もとより心得させ給ひたれば、御
前にて、聞きどころあるほどに、夜昼、習はしたてまつ
り給ふ。いとさどく心得て習ひとり給ひ、君ばかり伝へ
たる人もなしと、ほめたてまつり給ひしなり。うちうち
に試みんとて、春の夜の、のどかに霞るるに、御方々を
よびたてまつりて、御樂あり。これを女樂
といふなり夕霧の大将、御
簾の外にて、御琴ばかりとのへて、参り給ふ。女三の
宮(こと)のけんじ第二の師のふ(ぬ)の(事)の御琴なり。されど
も、御子にも方々の御女房にも伝へざりしを、この宮に
伝へたてまつり給ふ。紫の上の三つの恨みに入りたり。

紫の上、和琴 女御は、箏の琴

るはまさりたり。これは物によそへて付くべし、又、この巻に
落葉の宮といふことあるべし

女三の宮に、衛門の督あひたてまつりて後に、北の方
にもちたる女二の宮は、この女三の宮には御姉ぞかし。

御母は、その筋もなき下藤の更衣なり。朱雀院の西山の
御寺へ、御髪おろして移ろはせ給ひしより、女三の宮は、
源氏、賜はり給ふ。衛門の督も、宮たちを、父大臣望み
給ひしかば、この女二の宮を賜はり給へり。思ひ乱れ、
うちながめて、三の宮に、さも劣り給ふぞかし、と思ひ
て、よみし歌に、

諸葛落葉を何に拾ひけん

名はむつまじき挿頭なれども

と、よみしより、この宮をば、落葉の宮と申す。かたち
こともなく、しめやかにおはせし人なり。小野に住み給
ひしより、小野の落葉の宮といふことあるべし。心得て
付くべし。

明石の上、琵琶 源氏、唱歌し給ふ
夕霧の御子、笛 鬚黒の大将の御子

玉鬚の御服なり。これは幼きほど
にて、笙の笛吹かせ給ふ

いづれもいづれも、とりどりにおもしろし。その時、
かの御姿どもを、花にたとへさせ給ふ。まづ、女三の宮
の御方をのぞかせ給へば、二月十日ばかりの青柳の、は
つかに枝垂りはじめて、鶯の羽風にもなびきぬべくある
に見え給ふ。桜の細長にて、御髪左右よりこぼれかかり
て、柳の糸の様したり。紫の上は、大ききよきほどにて、
様態あらまほしく、あたりも匂ひみちて、花といはば梅
にたとへて、春の曙に霞の間より見ゆる榊の心地す。
これぞ、限りなき御様なり。女御の君は、木高き岸より、
かたはらに並ぶ花なく咲きしをれたる、藤の心地して、
よしありて見え給ふ。かかる中に、明石の御方は、けお
さるべけれども、あらまほしくもつけて、五月待つ花
橘の花も押し折りたる心地す。高麗の青地の錦の、
端さしたる襷に、みづからは居ず、琵琶をうち置きて、
たはやかにつかひなしたる撥音は、音を聞くよりは、見

源氏小鏡下

二十一 柏木

源氏四十八の春より
秋のこと。

月卿雲客をなずらふるには、衛門の督をば、柏木によ
そへたれば、さて、柏木とはいふなり。歌にも、この人
をば、柏木とよみたり。この人、女三の宮のことゆゑに、
病限りになりて、今はの折、大納言になさる。この人死
にたること、恋といふ。源氏その心をほのめかして、酒
を強ひて、御心よからぬ御目づかひをしたまひしより、
心の鬼にや、いとどしく心地かき乱りしなり。限りの折、
心知りの小侍従をよびて、宮へ申す。

今はとて燃えん煙も結ばほれ

絶えぬ思ひの名をや残さん

女三の宮、御返し、

立ち添ひて消えやしなまし憂きことを

思ひ乱るる煙くらべに

とありしをこそ、女三の宮の煙くらべとは、いひ侍れ。柏木には、たよりあることばか。この病のうちに、宮、薰大将を生み給ひしなり。源氏は、わが御子ならねども、人の思はんことをおぼしめして、もてなし給ふ。つひに、そのまま、夜など、とどまり給ふことなかりしかば、宮の御心のうちぞ、いとほしき。身の憂さを嘆き沈み給ふほどに、御心地も、例様にもおはしませず。これも、御物のけゆえなめり。すでに限りとおぼしめして、かかるついでにおぼして、さしも物はか・なく、か弱き御心に、御身の憂さをおぼしめしとりて、父院の上へ申させ給ひて、御髪おろさせ給ひしなり。

これを聞きて、大納言、いとど病重りて、死にき。限りの折、夕霧の大将は、かの柏木の大納言には妹婿ぞかし、雲居の雁は、柏木の妹なり、仲よかりしかば、よび寄せて、さまざま言ひおき、かの若君のことをも、かたはし言ひ聞かせ給ひて、つひに、親にも先だちて失せぬ。

さて、女三の宮は、ここち少しよくなり給ひ、かの若君を、うつくしくおはしませば、源氏、いとあはれにお

ぼしめして、かしづき給ふ。五十日の御よろこびの折、若君を、源氏抱きて、宮の御そばへ、人のなき間に、さし寄せ給ひて、御歌、

誰が世にか種をまきしと人間はば
いかが岩根の松は答へん

と、のたまひしかば、宮、言はん方なく恥づかしくおぼして、ひれふし給へり。さこそ、恥づかしく、心憂くおぼしめしけん。これぞ岩根の松といふことあらば 柏木の巻にありと心得べし 衛門の督失せしこと、春なり。父の大臣よみ給ひし歌、

木の下の雲に濡れてさかさまに
霞の衣着たる春かな

と、よみ給ひしなり。これらをとり合はせて付くべし。柏木に付くべきこと、

- 煙くらべ ○岩根の松
- 誰が世にまきし種 ○五十日の祝ひ
- 柏木 ○燃ゆる思ひ

これら皆、恋の心なり。柏木よかるべし。

二十二 横笛

源氏四十九歳なり。薰二歳なり。

衛門の督の北の方、落葉の宮をば、一条の宮とも申す。衛門の督失せて後、あはれに思ひし仲の形見なれば、夕霧の大将の一条の宮へ、あはれにかすかなる御とぶらひに、しばしば参り給ふほどに、下心なきにもあらず。八月半ばの、ことにおもしろく、あはれなるに、あこがれて、夕霧の大将、この宮へ参り給ひたれば、御母御息所は和琴、落葉の宮は御琴あそばして、ながめ給ふ。折節、大将参りて、南面の御簾の前に、簀子におはします。

内より、笛を取り持ちて、まことに伝はるべきよしをも、のたまひしなど、思ひ出づるほどに吹きすぎ給ふ。想夫恋を吹き給ひて、御簾の内を、わりなくすすめ給へば、思ひ及び顔なり。かくも、かたはらいいたけれども、末つ方を引き給ひしなり。その折、内より、

横笛の調べは殊に変はらぬを

むなしくなりし音こそ尽きせぬ

この笛をば、やがて贈り物にとて、大将に奉り給ふ。

これなん、陽成院の御笛といひたり。大将、わが宿所三条へ帰り給ひて、少しまどろみたる夢に、柏木の衛門の督、ありしなからの姿にて、「この笛は、思ふ方、殊に侍るものを」と言ひて、歌に、

笛竹に吹き寄る風の如ならば
末のよ長き音も伝へなん

といふことを御覧じて、かの笛を、末の世は薰大将に伝へよ、となり。つひに伝へ給ふ。さてこそ、薰大将をば、横笛の中將とはいふこともありければ 心得べし

- 吹き伝ふる笛 ○落葉 ○夕霧

さて、この巻には、薰大将、二歳になり給ひしかば、柏木の一めぐりの仏事にも、親たち、限りなく嘆きとぶらひ給ふ。

六条の院は、さまざま、おぼしめし出でつることさへあれば、あはれにおぼしめして、かの若君の御方よりと心ざし給ひて、黄金百両、殊更にとて、つかはされければ、人は心を知らねば、親たちをはじめて、あはれにかたじけなき御情と、喜び給ふ。

黄金といふことあらば、人こそ知らね、思ひよそへ

し黄金、などといふこと、付くべし。この巻に、なま箱といふことあり。

朱雀院の御方より、箱を、女三の宮へ参らせ給へり。

この宮、御髪おろし給ひて後は、入道の宮と申すなり。若君、取り持ちて遊びしところも添そひしかば、箱と心得べし。

ならびに 鈴 虫

源氏五十、夕霧三十、冷泉院三十三。

八月十五日夜の月、おもしろく澄みわたりに、限りなくあはれなれば、六条の院は、うそぶきながめ給ひて、入道の宮の御方へおはしまして、月御覽するに、御前の前まへ裁はに放はなされたる虫どもの中に、鈴虫、はなやかに鳴き出でたれば、

大方の秋をば憂しと見しかども

ふり捨てがたき鈴虫の声

といふことを、よませ給ひし。この歌ゆゑに、巻の名を鈴虫といふなり。月・くまなく、ふり捨てがたき鈴虫、などといふことあるべし。

二十三 夕 霧

これも源氏五十歳なり。

大将、小野にてよみ給ひし歌に、

山里のあはれを添そふる夕霧に

立ち出でん方なき心地して

この夕霧の大将を、まめ人といふことありとすべからず。されば、心を定めてそぞろかず、実なるゆゑに、実男まとはいふなり。

夕霧の大将の、小野の通とひ路は、かの落葉の宮に深く心をかけ給ふほどに、そのころ、母御息所、一条の宮にて和琴わごんひきし人、物のけにわづらひて、いたく悩みしかば、宮をば連れたてまつりて、小野といふ山里にて、さやうの折の用にもや持ち給へる所へ、移うつろはせ給ひし。大将、いと忍びておはしたり。御駒にて出で給ふ。道すがら、秋深き野山のけしき、すぐくあはれなり。おはし着はきて、まづ、かの御心地をとらひ給ひて後に、宮のおはします方の實ま子におはしまして、御簾みすだ引きかづづき、少将の君といふ女房呼び出して、何やかやとのたまふほ

どに、ほどなく日ひも暮れて、霧深く立ちこめて、籬かきの鹿も、虫の音も、涙もよほす滝の音、とり集め、あはれ深く、帰らん方もなき心地して、この歌をよみて、その夜は、とどまり給ふ。

○夕霧 ○秋深き野山

○籬の鹿 ○虫の音

○滝の音 ○落葉

など、小野に付くべし。暁あけ、帰り給ふ。小野へ文奉り、御返事、宮は、いとど物憂く恥づかしくおぼしめして、書き給はず。いかがせんとて、御息所、心苦しきをとりに給ひつつ、かかるまぎれに、その夜は小野へもおはしなさざりしを、母御息所、軽々しき御子はさておきぬべし、薄き方にやと思ひなされて、いとど心地も苦しく、弱り果て、つひに、かくれ給ふ。罪深かりし、宮の御ためしかな。

四十九日過ぐるままに、京へ移したてまつり給ひ、三条の上と、十五日づつ通ひ給ひしなり。この巻につるばみのこれ人の言ひ出し

落葉の宮の使ひ給ひし少将の君といひし女房は、故御

息所にもゆかりあれば、かくれ給ひて後、薄染めの染みたる裳、唐衣からぎを着て、几帳こたぎ、引き寄せて、大将のとぶらひにおはしたるに、対面せしなり。この巻に栗栖といふこと、小野にとどまり給ひし夜、いたく忍ぶことなれば、乗りておはしたる馬の御供など行きとどまり、「暁御迎へに参れ」とのたまひまなり。されば、小野には、

○栗栖 ○馬大将の御馬 ○移うつへの鞍くら

などいふことあるべし。このころは、深き秋なりと心得べし。

二十四 御 法

源氏五十一の春より、同じき秋までなり。

紫の上の御惱み大事にて、年月書かせられし千部の法華經けみぎょうの供養くきやうに、いかめしき大法会あり。たぎぎの行道かうだうなどありて、いと尊たうとし。仏ぶつの御法みのりなれば、いふべし。かくれ給ひたりとて、心はむげになきを、心細くおぼしめして、御子などもおはしませず、この世には浅かりける契ちぎりのほど、おぼしめし知られて、いとあはれにて、このことあのことと、賢かみしくこそ、のたまひ置かねども、

さまざま、心あてにもし置かせ給ふことも、いとあはれにて侍り。深き契りの女房ども、又、御方々も、あはれにありがたき御心のほどを、惜しく、あたらしく思ふ人多かるべし。

三の宮と句言 姫君をぞ 朝夕言育てたてまつり給へば、見たてまつらざらんほどのこと、あはれにて、三の宮を御前に据ゑたてまつりて、「われなくなりたらん時は、この対に住み給ひて、この梅むすか・と桜をば、形見に取り分け給へ」と申し給へば、幼き御心にも、いたく伏し目になり給ひて、御袖をまさぐりて、まぎらはし、立ち給ふさてこそ、末までも、匂ふ兵部卿の宮は、この対に住み給ひし。かくて、むげに頼もしげなくなり給へば、中宮出で給ふ。この中宮にぞ、よろづ、申し置き給ひぬらん。少し起き上がりて、中宮に對面したてまつり給へば、院、御覽じて、「今日は、いとよかめり。この御前にては、こよなきにや」と、のたまへば、紫の上、

おくと見るほどぞはかなきともすれば
風に乱る萩の上露

かくて、日を経て、重りて、八月半ばほどに、かくれ

とあり。この心、昔の大將の御母、葵の上のかくれ給ひしも、このころのことなれば、おぼしめし出でて、よみ給ひしなり。殊にあはれにやさしくおぼして、御返し、露けさは昔も今も思ほえず

大方秋の夜こそつられ
と、よみかはし給へり。御嘆きより、御簾の外へも出で給はず、ただ、おぼしめしほれたり。人に見え、をこがましかりなんことをおぼして、これや感泉殿を出でやらず、渺茫として夢に似たる心ねな・んかし。雲隠れ、この御嘆きゆゑぞかし。秋の末つ方かとよ、秋好む中宮より、御使ひあり。

六条の御息所の
御むすめなり
秋に心をとどめざりけん
枯れ果つる野辺を憂しとや亡き人の

この紫の上は、春の曙をめで給ひしゆゑ、かくは、よみ給ひしなり。いと故ありてぞ、おぼえし。御法には、ただいづくまでも年経し別れの悲しき心ねとすべし。法華經の供養は、春なり。紫の上かくれ給ふは、八月半ばなり。まことや、春の御法に、花散る里の御方へ御使ありし御返事に、花散る里、

させ給ふ。院の御心のうち、思ひやるべし。もしやと、守り給ふとも、限りの様は著かりければ、御髪おろさんとして、その作法するに、振分髪おろの昔より手馴れ給ひて、今とは、そぎおろしけん、明け暮れの心迷ひ、夢現ともわかまへ給はず。日ごろ馴れ仕うまつりし人々、さらに思ひ分く方なくて、物覚えたる者、一人もなし。なかなか、院ぞ、御心強くもてなし給ひて、大將の君に、のたまひ合はせて、事も行なはせ給ふ。この大將、昔、野分の朝かとよ、風のまぎれに、のぞきて見たてまつりし御朝顔、いかならん世にか、おほけなきまではなかりしかども、忘れがたく思ひたてまつりしかば、今ならではとおぼして、何心なくうち臥し給へる御顔を、つくづくとももりたてまつり給ふに、いとど光さし添ふ心地して、むなしき御骸に、わが魂の見入る心地せしぞ、はかなかりし。さて、はかなく灰になしたてまつりて、七日七日の御仏事も残り・なく、秋深く、風はだ寒く、吹きしをりたる夕暮れに、大殿より御使あり。昔の小侍徒なり。

古への秋さへ今の心地して
濡れにし袖に露ぞ置き添ふ

結びおく契りは絶えじ大方の
残り少なきみのりなりとも

- 御法
- 明け暮れの夢
- そぎ捨つる黒髪
- 秋の別れ

などといふことなり。この巻は、なかなか、ことばもなし。いづくも別れの仕儀なり。

二十五 幻まぼろし 源氏五十二歳、薫五歳、匂宮六歳なり。

源氏、この思ひに嘆き沈み給ひて、空をうちながめ給ひて、

大空を通ふまぼろし夢だにも
見え来ぬ魂の行くへ知らせよ

かくれ給ひて又の年の春の光を見給ふにも、春に心をしめ給ひしことを、おぼしめし出でて、あはれなるに、三の宮、かの形見の紅梅に、鶯の鳴きけるにも、「知らず顔にて来る」と、ながめ給ふ。かへし、人なき春とも知らず、大方の春にほのかされてにや、榊桜、花桜、咲き乱れて、散る桜あれば咲く桜、桜の山のと、見わた

されて、

本歌に、

桜咲く桜の山の桜花

咲く桜あれば散る桜あり

あはれのあらざらん。藤、山吹の、心地よげに開けはじ
めつつ、心選びして植ゑおき給ひしに、荒れ果てんよと、
あはれにて、

今とはとて荒らしや果てん亡き人の

心とどめし春の垣根を

と、詠じ給ふ。兵部卿の宮と申したてまつるは、螢の宮
なり。参り給ひて、紅梅の下にうそぶき給ひしに、

わが宿は花もてはやす人もなし

何にか春のたづね来ぬらん

幻の春は形見の梅、桜といふことあるべし。五月雨
になりては、いと晴れ間なき御心なるに、大将の君、参
り給ひて、御物語申させ給ふに、待たれつるほととぎすの
のうち鳴くにも、

亡き人をしのぶる宵の村雨に

濡れてや来つる山ほととぎす

と、うらやまれ給ふ。かくて、八月十四日、御一めぐり
なれば、上下齋して、極楽の曼陀羅、書きおかせられた
りしを、供養させ給ふに、かの中將の君、扇に書きたり。

恋ひ恋ふる涙は際もなきものを

今日をば何の果てといふらん

と書きたりしを、御覧じて、御心のうち、さこそおはし
けめ。九月九日には、綿おほひたる菊を御覧じて、「ひ
とり袂にかかる秋かな」と、悲しび給ふ。神無月に、大
方の空も晴れ間なく、あはれも殊に深く、「降りしかと」
と、うちながめて、幻といふ歌をよませ給ひしなり。

十一月、豊明には、人知れず、昔のことおぼし出でて、
「日かげも見えず」と、恋ひ給ふ。御本意遂げ給ひ侍ら
んことも近き御心にや、御前に人二三人も侍はせて、御
反故ども、破り捨て給ふに、かの須磨の別れの折書きか
はし給ひし御文の、ただ今のやうなる御墨つきを、げに、
跡は千年の形見なり。かく、この世ながらの御別れをだ
にも嘆き給ひけんよと、押し当て給へるに、降り落つる
御涙、まぎらはしかねて、いかならん道までとやおぼし
めしけん、かき集め、ひき結びて、書きつけ給ふ。

又、賀茂の祭に、古への御阿・礼、おぼしめし出でて、

いとさびしければ、中將の君といふ女房は、紫の上、心
殊に、おぼしめしたりし人なり。源氏、忍び忍びにおほ
しめししかども、幼くより生ほし立て給ひしかば、殊の
外に怖ぢたてまつりて、幼くよりうちとけたまはざりし
に、御形見とあはれにて、この人ばかり、御覧じ放さず
にやおはしけん。祭の日、昼寝したる所へおはしました
り。起き上がりたるに、かたはらなる葵を御覧じて、この
挿頭よ、名さへ忘れけり」と、のたまひければ、中將、

さもこそはよるべの波に水草居め

今日の挿頭に名さへ忘るる

と、申したりしも、やさしかりしことなり。蜩の声を
聞き給ふにも、かごとがましき虫の声かなど、恨み給ふ。
螢の飛びかふも御覧じては、「夕べの空に螢飛ぶ」と、珍
らしからぬ古言さへ、おぼしめし出でて、時ぞともなき
と恨み給ふ。七月七日には、御あそびもなし。星合見る
人もなし。枝を交はしし御契り、おぼしめし出でて、

七夕の逢ふ瀬を雲の上に見て

別れの庭に露ぞ置き添ふ

かきつめて見るも悲しき藻塩草

同じ雲居の煙ともなれ

とよみ給ひし御心のうち、思ひやるも、せん方なし。寒
き御独り寝は、いとど寝られ給はねば、御手水召して、
御行なひし給ふに、雪いみじく降りて、寒きもわりなき
に、埋みたる火を起こして、御火桶奉る。古へより
のこともおぼし出づる中にも、入道の宮へ渡り初めしは
じめ、心・はしも、色にも出し給はざりしかども、あぢ
きなわぎやと、事にふれておぼしめしたりしぞかし。

さまざまなる忘れがたき中にも、雪降りたりし時、
立ちやすらひしに、身さへ凍み氷りたりしに、泣きぬら
したる御袖引き返し給ひたりし面影、いかならん世にか、
又見んと、しづの芋環ならねど、昔を今にと繰り返し給
ふ。御数珠の玉散るばかり降り落ちし御涙は、御前に侍
りし人々の袖も、所を借りしことにや。師走は、御仏名
なるに、今年ばかりとおぼしめしけるにや、導師に盃
給ひて、今日ぞ出で給ふ。御かたち、いとど光るやうな
りしぞかし。導師の盃のついでに、
春までの命も知らず雪の中に

色づく梅を今日かざしてん

と、よみ給ひしにこそ、雲隠れの御心なりけめ。正月の御引出物、御子たち、上達部などのものまで、ととのへおかせ給ひてけり。とりわけたることはなし

二十六 雲隠

この巻、世に触らさず。雲隠れは、遁世のことなれば、光る源氏と申せば、雲隠れ、よきたよりなり。光隠るる思ひゆゑ、などいふべし。

二十七

兼中将とも 十四歳より十九歳のことなり。
句 兵部卿の巻とも

この巻は、三の宮と申して、紫の上、養ひたてまつりて、梅、桜を譲り給ひしは、明石の中宮の御腹、源氏の御孫、この宮の元服し給ひて、兵部卿の宮と申す。御かたちすぐれ、御心はなやかにかろがるしきまでぞおはしましける。兼中将とは、女三の宮の若君、人目には源氏の御子、まことは柏木の権大納言の子ぞかし。この君も、

竹川のはしうち出でし一節に

深き心のほどは汲みきや

この歌ゆゑなり。鬚黒の大将をば、後の大臣とて、関白もち給ひしぞかし。失せて後、姫君、玉鬘の御腹に二所おはします。御盛りにととのひ、うつくしくおはしましける。兼大将の、いまだ四位の侍従とて、きびはおはせしころ、この姉君を、心かけてよみ給ひしなり。この殿へおはして、姫君の弟、これもいまだ藤の侍従とて幼なかりしと遊びて、竹川など歌ひて、よみし歌なり。又、同じころ、夕霧の大臣の、雲居の雁の御腹の御子、藏人の少将といひしも、この姫君を心かけて、ある夕暮れに、この姫君たちに、桜を賭物にて碁を打たせ給ひしを見て、いとど心を尽くしけり。

竹川に碁といふことは、この心なるべし。このことばには、春の夕暮れ、碁の勝ち負け、花の賭物、かいま見、などいふこと、付くべし。

されども、人々の恋もいたづらごとにて、姉君、冷泉院へ参りて、若君など出で来給ふ。妹の君は、内へ参りて、母の内侍のかみ譲りえて、内侍のかみになり給ふ。

元服して、冷泉院に、源氏この君をば申しおかせ給ひしかば、世のおぼえも軽からず。院にのみ侍ひて、いとかたじけなく生ひ立ちけり。おのづから、芳しくて、この世のかをりならず、ありがたければ、三の宮、うらやみ給ひて、わざと好みて、春は籬の梅をかざして御身にふれ、夏は花橘の袖の香なつかしく、秋は枯れゆく藤袴老い忘るる紅菊、までも、匂ひを集め給へば、おのづから、御匂ひ芳しくおはしますせば、人々、匂ふ兵部卿の宮と申しけり。この御方々ぞ、源氏の御後には、立ち続き、人の心をも乱し給ひし。されば、仏のかくれ給ひし後、阿難世に出でしを、二たび仏出で給へり、と思ひしごとくなり。

されば、雲隠れなど、匂ひにも付くべし。匂ふといふことは、匂ひなつかし、などいふ。薫るは、おのづから薫る匂ひ、などいふべし。

ならびに 竹川

この巻竹川といふこと、

ならびに 紅梅

兼十九歳の正月なり。この巻に源中納言。秋なり。

そのころ、按察の大納言と聞こえしは、故衛門の督の弟ぞかし。世のおぼえいみじく、何事も栄えありて、時の人もてなしたてまつり、大臣になり給ふ。紅梅の大臣は、この人と心得べし。北の方は鬚黒の大将の御むすめ、かの火取りの灰かけし人の母なり。真木柱はなれがたくせし姫君なり。兵部卿の宮の北の方になりてしを、姫君一所おはします。この御方の庭に、えならぬおもしろき紅梅あり。これを紅梅の御方と申しけり。さてこそ、紅梅といふ。継父大納言、この梅の枝のおもしろきを折りて、御子の若君、いまだ、わらは殿上のほどなるを、文にて、匂ふ兵部卿の宮の御方へ、紅梅、薄様に文書きて、奉り給ふ。

心ありて風の匂はず園の梅に
まづ鶯の訪はずやはある

と、申されたりしなり。宮、いと興ありておぼしめして、常に文などありしかど、まことしきこともなし。

宇治十帖

四十四帖の外に、巢守とて、おぼつかなき所々、清少納言が作りたり、と申すことあり。その中に、この人々の事あり、といへり。又、薫中将のならば、紅梅、竹川ともいへり。又、竹川をまついふことあり。同じことなれば、論ずべからず。

一 橋姫

優婆塞の巻ともいふべし。薫十六歳より十八歳の事なり。

この巻を橋姫といふことは、薫大将の歌に、

橋姫の心をくみて高瀬さす

棹のしづくに袖ぞ濡れける

と、よみ給ふ。これは、宇治の橋姫の本説あり。又、優婆塞といふことは、宇治に、古き宮、住み給ふ。この宮は、桐壺の帝の八の宮、源氏には御弟ぞかし。冷泉院の御位の折、朱雀院の御母悪后、横様におぼし構へて、この八の宮を御位にたてまつらばや、などの、くは・だてありけるに、心がまへや漏れけん、源氏なども御心よからず思ひたてまつりて、この世におし消されておはしけるが、八条に御家ありて、住ませ給ふ。この八条の御家さへ焼けにし後、いとあさましく、都の御住まひもむつかしくおぼして、宇治に、山里持ち給へりける所に、

あやなくもろきわが涙かな

移り住ませ給ふ。それよりぞ、宇治の宮と申す。やがて、御髪などおろして、惟喬の親王、小野の山路の跡をもたづね給ふべきに、いとうつくしき姫君二人もちたてまつり給ふが、見捨てがたくおぼして、俗ながら行なはせ給ふ。大方、この宮は、もろもろの道、達者にておはしましけるほどに、薫大将、とくる参りて、物など習ひたてまつり、なつかしく思ひたてまつりて通ひしほどに、姫君たちにも思ふ心ありて、橋姫の歌もよめるなり。この姫君たちの母宮は、大臣の御むすめにておはせしが、妹の宮生みたてまつりて、やがて、はかなくならせ給ふ。そのまま、宮、聖にて、俗ながら行なひ給ふ。聖の宮といふことを、人言ふとも、あらがふべからず。この巻に、有明の月を招くといひて、よろづ、やさしくおもしろきことにすることあり。薫大将、そのころ、宰相の中將にておはしけるが、この姫君たちを、いかにしてがなと、ゆかしく思ふほどに、深き秋は、まして山里深くなるまに、風の音ひややかに物がなしく、何となく袖もいたく濡れて、

山おろしに堪へぬ木の葉の散るよりも

と、口すさびて、馬にて入り給ふほどに、近くなるまに、物の音がすかに聞こゆ。わざとの御遊にはあらず、黄鐘調に調べて、ひきすさびたる撥音、絶え絶えに聞こゆ。箏の琴、いとけだかく、おもしろくて、河波響き、松風折にあひたる心地して、馬引き止めて聞き給へば、この宮に、姫君たちのあそび給ふなるべし。やはら入りて、宿直人に尋ね給ひければ、宮は、宇治山の奥に、阿闍梨とて尊き聖あり。四季にあてて念仏をつとめに、この坊へ上り給ふ折節なれば、御留守にて、いとかすかなり。この宿直人に心を合はせて、のぞき給へば、いとあはれに、すこげにて、御簾高く巻き上げて、柱隠れに居隠れて、撥を手まさぐりにして、雲隠れたる月をさしのぞきて、「扇ならでも、月は招くべかりけり」とこれ名句なりのたまへば、いま一人、琴の上に傾きかかちて、「入る日を招くとこそ言へ。殿上人の目を返せしことまことに」とて、うち笑ひたるけしきども、言ひ知らず、けだかく、うつくしく、身にしむばかり思ふ。とりわき、扇ならで、の面影は、まことしく思ひて、暁、帰りけり。

宇治といふことに。

○山かさなれる住まひ ○都より分け入ること

○四つの緒 ○撥 ○有明招く

○宿直人 この宿直人は ○鬘 おもづら

かつらひげなり ○棹のしづく ○川波高く

などいふことあるべし。さても、この巻に、弁の君といひし女房は、この薫大将のまことの父、柏木の衛門の督の乳母なり。衰へて後、西の国の受領の妻になりたりしが、後に上りて、この宮に、姫君たちの後見にて侍りけり。姫君、御母方に少しも離れざりしゆゑなり。さて、この宮にて、弁の君の、薫宰相中将に、忍びて対面して、昔のことども語り聞かす。いとあはれに不思議に思ひて、この弁の君をも、後まで、薫、はぐくみ給ふ。かの衛門の督、今はの際に、いかにもして、この宮へ 女三の宮の 奉れとて、弁の君乳母なれば、言ひおきしことありとて、取り出して薫に奉る。唐の浮線綾にて縫ひたる袋のうちより、たまさかに通ひし文、御返事、五六枚、さては、かの手にて書きたる文あり。いかならん世にか奉るべきと思ふに、あひたてまつるうれしさよとて、奉る。取り

て見給へば、封つきたる上に、上といふ文字を書きたり。開くも珍らかに恐ろしくて、御覧すれば、大納言の手は鳥の跡のやうにて、かの君の生まれ給へる、ゆかしく悲しきこと、宮の御様変へたることの、あへなく口惜しきことどもを、さまざま書きたり。跡は千年の形見にやと、言ひ知らずあはれにて、取りて帰りしなり。かやうのことを取り合はせ、宇治にて聞きし身の橋姫などいふやうなる句を付くべし。

二 椎本

薫十九歳より二十までなり。

この巻を椎が本といふことは、薫の歌に、立ち寄らん蔭と頼みし椎が本

むなしき床となりけるかな

この優婆塞の宮、かくれ給ひさふらはんとて、ほど近くなりて、・大將、例の四季の念仏に、山へ入り給ひぬらんとにや、姫君たちにも、物のたまひおきなどし・給ふに、薫も、都にはまだ色足らぬ秋のゆかしき音羽の山も色づきて、なほたづね来たりけり、など、ながめてお

はしたるに、宮は、待ち喜び給ひて、後のこと、姫君たちのことなど、つぶさに申しおき給ひて、そのまま対面もなく、むなしくなり給ひしこと、飽かず悲しくて、われも、本意遂げば、必ず同じ庵になど契り給ひしこと、思ひ出でて、宇治の宮、いつしかはかくれ給ひて後、荒れたるを御覧じて、椎が本の歌をよみしなり。

○椎が本 ○宇治の別れ

などといふことあらば、かやうのことを付くべし。宮のかくれ給ふことは、秋なり。又、

○宇治の中やどり ○初瀬参り

などといふことあり。この巻、二月二十日ころなるべし。匂ふ兵部卿の宮、この優婆塞の宮へ、薫大将参り通ひ、又、姫君たちをも心にくきさまに物語り申しおき給ひしほどに、人知れずゆかしくおぼえて、にはかに初瀬へ参り給ふ。多くは宇治の中やどりのこと、ゆかしければなるべし。さて、この姫君たちの御方へも御消息などありて、おはしまさんとしたりしかども、人目繁く、京より御迎への人々にともあひしかば、つひにかなはで、帰り給ふ。

宇治の中やどりといふこと、十・帖の中に、あまたあり。これより始まりて、中やどりとは見ゆ。初瀬参りも、あまたあり。この巻より始まるなり。

三 総角

薫二十歳の秋までなり。姫君二十五歳、中の君二十三。

この巻を総角といふことは、薫大将の歌、大君によみて奉りしなり。

総角に長き契りを結びつつ

同じ心によりもあはなむ

優婆塞の宮の一めぐりの仏事を、姫君たち、いとなみ給ふ。薫も事加へんとて、渡り給ひて、よみしなり。

御返事、姉君、

貫きもあへず腕き涙の玉の緒に

長き契りをいかで結ばん

つひに、心強くて失せ給ひしなり。御妹の君をと心ざして、のたまひしかども、姉君を深く心かけて受け引かず。ある時、又、御返事少しゆるぐやうなりしかば、男の方は、心やすくおはしたるに、中の君と一所に寝た

るに、男の影のしければ、単衣ばかり着給ひて、姉君、すべり隠れ給ふ。止まり給ふ中の君に言ひ寄りたれども、あらざりければ、いとも珍らかにうらめしくて、何となく語らひおきて、帰り・・・・・給ふ。匂ふ宮に中だちして、あひたてまつり、後に、二条の院の西の対へ迎へさせ給ひて、若君などまうけたてまつりしなり。さて、宮、御覧じそめては、いと色なる御心にて、しばしば宇治へ通はせ給ふほどに、御母后、帝など、聞かせ給ひて、この宮をば、筋殊に、おぼしたてまつり給たまふ宮なれば、軽々しき山踏みを、諫めたてまつり給ひて、「御心につく人あらば迎へ給ひて御覧ぜよ」などのたまひて、御心にまかせぬ夜離れを、女方は思ひ嘆かせ給ふ。姉君は、さは思ひしことと、言ひ知らず心苦しく、これのみ嘆き明かし暮らし給ふに、御心地も何となく悩ましくおはしませば、このついでになくなりなるとのみ、深く思ひ立ち給ふ。かくて匂ふ宮は、御心もあくがれ給ひて、何としても思ひ給へども、遙けき道なれば、するするとも思ひ立ち給はず。秋深きころなれば、紅葉御覧せんとて、出で立ち給ふも、宇治へおはしませむの

御心なり。舟どもかざり、調楽ととのへて、文作り、あそび給ふ。宮は、御遊びに御心も入らず、御中宿りにのみ、ながめやられ給ふ。かの宮にも、さても今日のついでありなむ、その上、道しるべの薫の方よりも、心し給へと、のたまひ送りければ、人知れず下待ち給ひて、木の下かき掃ひ、庭の朽葉取らせ、御簾かけ換へなどし給ふに、内裏より、大宮の御使ひとて、上達部、宮の大官など奉りて、「軽々しき御ありき、人少なにて、世の例にないぬべし」などあれば、事わづらはしくて、心ならず、むなしく帰り給ふ。

待つ方にも、帰るにも、さこそおはしつらんと、心苦しう、かの宮は遠からんは、さてもありぬべし。近き程にののしりおはして、むなしくは帰り給ふ辛さは、言はん方あらんや。げに男といふものは、かくこそありけめ、われも世にあらましかば、つひにはかかるべしと、深く姉君おぼしめしとりて、いとど御心地も弱々しくなりもてゆきて、大将、殿へおはしたるに、この中の君をわが身と思ひて見たてまつり給へと、かへすがへす言ひ置き、御年二十六にてかくれさせ給ふ。大将は、限りなく

思ひなきて、すでに御忌にこもりて、都へも帰り給はず。おぼろげのことにあらじと、方々、御とぶらひどもあり。ころは冬・なれば、いとど山里きびしく降り積む雪に、跡つけわびて、片敷く袖の氷とけざりし面影に、いとど嘆き加へ給ふ。総角、心強かりし嘆き、などと、ことによりて付くべし。舟の、かく間近き程にて帰りし、などといふこともあるべし。

四 早 蕨

薰二十一歳の春なり。

この巻を早蕨といふことは、優婆塞の宮の尊くおぼしめして、念仏などに籠り、今はの折もおはしましたりし聖の坊より、中の君の、姉君に後れて、ただひとりながめおはしませし所へ、春の初めに、蕨、土筆、をかしげなる籠に入れて奉るとて、

この春は誰にか・見せん亡き人の

かたみに摘める峰の早蕨

と、よみしなり。この歌・ゆゑに、早蕨とはいふなり。

されば、早蕨といふこと、宇治にも付くべし。

さて、中の君は、春の光を見給ふにも、「春や昔」とたどられて、わが身ひとり恨み給ふ。いそのかみ古りにし宮の薫に、春とな告げそと嘆き給ふ。故宮の失せ給ひしにも、ややたちまさりて、姉君の嘆きを悲しび給ふ。さて、この巻の二月に、匂ふ兵部卿の宮へ迎へられ給ひて、いとめでたし。その程のことばのことは、

- ひとり留まる
- 故郷を離るる
- 早蕨
- 峰の霞の立つを見捨つる
- 都へ出づる

などといふことあるべし。めでたく心ゆきて、又は、故郷の名残惜しき心ねを付くべし。

五 宿 木

薰二十一歳の夏より二十二歳の春までなり。宇治に行く、うれしき世、などといふことあるべし。

この巻を宿り木といふことは、薰大将、宇治の古宮に

やどりきと思ひ出でずは木のもとの

旅寝もいかにさびしからまし

このころは、宇治の大君失せ給ひて後、年月経れども、薰大将・嘆き忘れ給はず。中の君は、匂ふ兵部卿の北の方になりて、京におはしませば、宇治の宮、いとど荒れ果てなむ、とおぼして、かの宮の北の方に仰せ合はせて、寺になして、傍に寝殿を建てて、時々渡りおはしまして、かの昔のこと語り聞かせし弁の君も、姫君には別れたてまつりて、尼になりてしを、ここの宿守になし給ふ。おはしまして、御覧じめぐらして、さまざまおぼしめし出でて、日も暮れぬれば、とどまり給ひて、よみ給ひしなり。

さて、この巻に、匂ふ宮は、夕霧の大君の御むすめ六の君に、大臣、おしたち、あはせきこえ給ひて、時めかせ給ふ。宮は、かの中の君を、限りなくおぼしめして、夜離れなくならひ給ひて、いつしか物思はせんことを、悲しく、心より外になげき給ふ。ただならずさへ、なり給ふ。八月ばかりより、夕霧の御方へおはします。西の対には、かくや思ひしと、かへすがへすも山路分け出で給ひけんほどの心軽さ、人やりならず、くやしく、おぼし沈みて、げに海人も釣するばかりなり。御枕をそば

だてて、ながめ出し給へば、有明の月も、やうやう澄み登り、ひやかかなる風の音、虫の声々にも、昔荒ましかりし山里の住まひより物憂くて、かくぞ、よみ給ひし。山里の松の蔭にもかくばかり
身にしむ秋の風はなかりき
と、よみしなり。

荒ましかりし山里の住まひよりは、都の住み憂きなどといふこと、物恨めしきことの句、取り合はせて付くべし。
さるほどに、宮、かやうに夕霧の大君へ通はせ給ふひまに、薰大将、媒のことなれば、かの中の君をば御子のごとくおぼしめしたることなれば、常に、この宮へもおはし通ひ給ふことなれば、世の中恨めしき物語などして、更くるまでおはして、いかがありけん、まことはなけれども、這ひ寄りてしに、例の移り香、染み深きを、宮、とがめ出でて恨み給ふ。うちとけて心やすき方なれば、宮も、のどかにおはしまして、深き秋のあはれは、殊にもよほされて、涙の露吹き結ぶ尾花の、物より殊にさし出でてうち招くを御覧じて、宮、なつかしきほどの

御直衣ばかり着給ひて、御琵琶をわざとならで、黄鐘調らくにひき給ひて、よみし歌に、

穗に出でぬ物思ふらし篠薄

招く袂の露しげくして

女君、返し、

秋果つる野辺のけしきも篠薄

ほのめく風につけてこそ知れ

と、よみ給ひしなり。さて、女君にも、箏の琴すすめて、ひかせたてまつり給ふ。

かやうのことを、ことばに取りて行くべし。これは、あながち宇治には行くべからず。すでに都に給へる時のことなれば、心得べし。薰大将、近づき寄りし時、かの中の君、ただならずおはしければ、帯の手に当たりしことあり。これは、しるしの帯の当たたり、などいふことあるべし。この巻に朝顔といふこと、これも、宮、夕霧の大君の方におはします間の、朝ぼらけに、思ふ心しあれば、薰おはすとて、朝顔の花を折りて、扇の上に置き、御物語などの間に、赤みゆくを見せ、歌に、

よそへても見るべかりける白露の

契りかおきし朝顔の花

この歌の心は、姉君の、さしも遺言にし給ひしを、見たてまつらずなりゆく、くやしき心ねならんかし。

この薰大将、しばし言ひわたり給ふが、むつかしく、わづらはしくおぼして、いかがして逃れましと、思ひめぐらして、そのころ常陸の守といひし受領の妻は、この中の君などの御母の姪なり。中将の君とて、宮仕へしが、北の方失せ給ひて後、優婆塞の宮、時々御覧じけるにや、ただならずなりしかば、宮、限りなくくやしきおぼしめすに、それを恨めしく恥づかしおぼして、出でて受領の妻になり、言ひ知らずうつくしき姫君を生みたてまつりて、母、人知れず思ひかしづきて、その後、守の子どもも生で来たるにも、ゆめゆめ、同じ列にもせず、年月経るほどに、二十ばかりにも、なり給ひし。いかにもして、父宮の御方へも知らせたてまつらむ、と思ひて、北の方に言ひ寄りて、かくと申ししを、おぼし出でて、大君の御形見に、これを奉らんと、大将に語り出でさせ給ひければ、大将も、さもと思ひける歌に、
見し人の形代ならば身に添へて

恋しき瀬々の撫で物にせん

と、よみしかば、鮑かで別れし、などいふ句に付くべし。さて、大将、当帝の姫君、女二の宮賜はりて、いかばかりの面目にかあらん。されども、亡き人のことを忘れずして、宇治へおはしたれば、この姫君は、初瀬へ参りけるが、宇治に中宿りして、かの弁の尼と、知るべきたよりなれば、宿りて、物語などするを、大将の小君に心を合はせて、のぞきて見給へば、故姫君にも、いたくおぼえ、宮の北の方にも似たてまつり、これは心をかけて、つひにあふ。この人のことぞかし、東屋とも、浮舟とも、手習ひの君とも。これらは、宇治の中宿り、初瀬参り、形見、などいふこと、宇治なり。

宇治十帖の中に、菊の賭物の基、といふことは、この巻に、薰大将を、おほやけの婿に取り、給はんとて、世のそしりをおぼして、女御の宮の御方の菊、えならずおもしろき夕映えに、「殿上に誰か侍ふ」と御尋ねあれは、「誰がし、彼がし」など申す中に、そのころ、薰、中納言なり。取り分け、召し出でて、かの菊を賭物にて、御基を打たせ給ふ。内の御方、負けさせ給ひて、「まづ一

枝許す」と、のたまひしかば、中納言、心して折りて、奏し給ふ。

世の常の垣根に咲ける花ならば

心のままに折りて見まじや

内の御方

霜にあへず枯れにし園の菊なれば

残りの色はあせずぞあるかな

と仰せられて、婿に取り給ふ。かくて、忍び忍び参り給ふ。心やすくとにや、次の年の藤の盛り、藤壺にて、藤の宴したまひて、やがて、その夜、大将の御もとへ、官移ろはせ給ふ。大将になること、この巻よりなれり。藤壺の宴、このことなり。その夜の笛にや、かの柏木の奉りし笛を、大将吹くなり。

六 東屋

薰二十二歳の秋なり。

この巻を東屋といふことは、薰大将の歌に、さし止むる律や繁き東屋のうたてもかかると雨そそぎかな

なく慰む心あらんかし。

七 浮舟

薰二十三歳なり。

この巻を浮舟といふことは、歌に、橘の小島が色も変はらじを

わが浮舟ぞ行くへ知られぬ

このゆゑは、東屋の君を、薰大将、いざなひて、宇治にとり置きて、時々通ひ給ひしほどに、兵部卿の宮、かの北の方の御湯殿の間に、ほのかに見給ひし人を、いかなる人ならんと忘れがたく、秋の夕暮れに、北の方にも問ひたてまつる。とかく言ひ紛らはして過ぎゆく。

これは宮の北の方、薰中将に語り出し給ひし姫君を、母、左近の少将といふ人を、すでに婿に取らんとせしぞかし。それを、常陸の守聞きつけて、程々につけていとよき婿と思ひてやらん、わがむすめに引き越して婿に取る、いとど口惜しくおぼえて、宮の北の方のもとへ連れて行きて、あづけきこゆ。この北の方、御湯殿の間に、宮、のぞかせ給ひて、とかく言ひ寄り給ひしほどに、乳母あさましくおぼえて、母に告げたてまつれば、驚きて三条わたりに、いと荒々しき小家を持ちたる所に隠しおきぬ。さて、大将殿の、宇治へおはして、かの弁の尼を、まづ遣り給ひて、われも、かの三条の旅・所へ、おはしたる。宿直人、東声にて、「誰そや」などと、ののしりとがめし、その時の歌なり。かくて、その曉、わが御車に乗せて、宇治へ連れておはして、住ませ給ふ。旅の家といふことには、

- 律
- 雨そそぎ
- 東屋
- 宿直人

などといふことあるべし。雨少し降りたりしなり。ころは九月なり。大将は、しばしば宇治へ通はせ給ふ。こよ

んと心にかけて、御家人に詳しく尋ね給へば、然々と申す。ありし御ゆるすの間に、ほの見給ひし秋の夕べ、おぼし合はすることもありて、忍び忍び、出で給ふ。まづ、細き穴のぞきて御覧すれば、わが北の方にもおぼえたり。人しづまりて後、大将のおはしましたるまねをして、「道にていみじく恥ぢがましきことあり。かへすがへす、人に知らすまじ」と、ささやかせ給ふ。御声、よくまねびさせ給ふ。ぬれしめりたる御匂ひなど、紛ふべくもなし。右近といふ女房、出でて仕うまつる。さて、几帳の内へ入りても、ただ大将のおはしたると思ひよりて、うちとけぬれば、あらぬ人なり。あさましく、泣き給へども、かひなし。匂ふも薫も、思ひも分かぬ契りとは、これなり。暁、帰らんとおぼしつれども、さらに離れがたく、まことに死ぬべくおぼし惑ひて、御身を捨て、その日は留まり給ふ。その折こそ、右近は知りて、あきれ、あさましく思へども、夜はただ明けに明けぬれば、かなはず。さまざま恐ろしきこともを構へて、右近ぞ、述べやりける。さて、心静かに留まりて、浅からぬ御ことばを、尽きせず時の間も見ずはいかがせん、と

給へば、大きな岩の様、戯れたる常磐木のたはれ臥し茂れり。「かれ見給へ。千年を経べき緑の深さ」と、のたまひて、宮、

年経とも変はらぬものか橋の
小島が崎に契る心は

さて、舟より抱きおろさせ給ひて、御宿りにて、御物忌、三日たばかり給ひたりしかば、心静かにおはして、あやしき硯、召し出でて、御絵など書きすさびて、女、男、もろともうち添ひたるを書きて、「常に、かくてあらばや」と、御涙を浮けてのたまひし御面影、さこそ忘れがたくありけめ。この家に、網代屏風を立てたりしなり。

硯。絵。河より遠方
宿。網代屏風

これみな、宇治に付くべし。
たとしへなく長き日に、もろとも眺め出し給へば、雪いみじく積もりて、垣のもとなどには、友待つ雪消えがたく、木ずゑばかりぞ見ゆる。山は、鏡かけたるやうに、きらきりと夕日に輝きたるに、よく分け来し道のはかなさを、あはれおぼし添へて語り給ふ。その折の歌、

焦がれ給へば、女も、思ふとはこれをいふにや、とおぼして、恐ろしく悲しくおぼしけれども、うちなびきなどせしにや。さて、その暁ぞ、せん方なく悲しびながら、おのが衣々ひややかに、風の音も荒ましく、霜深き暁に、起き別れて、御馬にて帰り給ふ。その折、宮の歌に、
世に知らず惑ふべきかな先に立つ
涙も道をかきくらしつつ

浮舟、御返事に、

涙をも程なき袖にせきかねて

いかに別れをとどむべき身ぞ
など、いひかはし給ふ。思ひ・分かぬこと、人違へ、なにも付くべし。

かくて、なほ恋しきはせん方なく、いかがすべきやうなくて、宮、御物忌や何やと、かこつけ給ひて、又、忍びて出で給ふ。ここの人目もさすがにて、河より遠方に宇治川の宿をとり給ひて、小さき舟に乗り給ひて、さし向かひなり。遙かなる岸に漕ぎ離れたらん心地して、いと心細し。有明の月、澄み登りて、水の面曇りなきに、「これなむ、橋の小島」と申して、御舟さしとどめたるを見

峰の雪汀の水、踏み分けて

君にぞ・迷ふ道・は惑はず

といふ歌、何事に おもしろき例にいふなり。これも、川より遠方のことなれば、取り合はせて付くべし。ころは春なり。春の雪に付くべきなり。

その後、又、薫大将おはしましたるに、そら恥づかしく悲しくて、うち静まりてゐたるを、大将は、間遠なるを、さらぬやうにて恨むるにこそと、心苦しくて、こよなくもてつけたるかなと、いとど心まさりして、あはれも深くおぼして、朔日ごろの夕月日に、もろともに端近くうち臥して、眺め出し給へば、男は、物思はし。山の方は霞隔てて、寒き洲崎に立てる。所からは、いとをかしう見わたさるるに、ほかにては目馴れぬことのみと集めたる所なれば、見るたびごとに、なほ、そのかみのことのみ、ただ今の心地して、こよなき慰めもこの世のみかほと、恨みにし、恋し悲しと、下り立たねども、常々あひ見ぬほどの苦しさを、様よきほどにうち語らひて、
薫大将、歌に、

宇治橋の長き契りは絶えせじを

あやぶむ方に心騒ぐな

されば、

○かささぎ ○柴舟

なども宇治に心得て付くべし。

かくて、二三日して帰り給ふにも、面影恋しく思ふに、いとをこがまし。

さて、宮、それより、御心あこがれて、例ならずさへおはしけり。御文の通ひも、所狭きほどなり。大将の御使ひと、宮の御使ひと、たびたび行き合ひしかば、それより事頭れて、大将の方より、宿直人据ゑなどして、いときびしくもてなす。聞き明らかめて、大将の御方より、かの宮の御ことを恨みて、

波越ゆるころとも知らで末の松

まつらんとのみ思ひけるかな

と、宇治へ、のたまひおこしたり。ことあらはれぬと、思ひ嘆くさま、いと苦し。宮の御使ひあらはれし折の文の色は、桜につけて赤き色紙・なり。さてこそ、浮舟、思ひ乱れて、いかげんと身を恨みけるに、宮おはして、

案内し給へども、宿直人きびしくて、内へも入れたてまつらず。とかく言ひて、御使ひ、右近にあひたり。出づ

べきやうもなければ、侍従とて、右近と同じ心なる女房を、宮のおはします所へ奉る。御供の人、馬に乗せんとすれど、え乗らねば、わが沓をはかせて、衣の裾を取りて、立ち添ひて参る。宮は、御馬にて、遠く立ち給へば、

そこへ連れて参りあひ、物のたまはんとし給ふところも、便なれば、馬の障泥を敷きて、ほども、葎の繁き山がつの家居の、軒の下に下ろしたてまつりて、泣く泣く物のたまふに、里び・たる犬の声々・おとなふも心細く恐ろし。

これは、このすきにてあり。おもしろき為にてより合ふなり。よかるべし。

○山がつの軒の下 ○里・びたる犬

○障泥敷く

さて、むなく、宮、帰り給ひぬ。侍従、御有様を語りければ、女、枕も浮くばかりなり。大将、人離れたる所に置きたればこそ、宮もおはしませ・とて、急ぎ迎へたてまつらんとて、御家造り給ふ。宮は、それより前に

迎へ取りて御心のままに、とおぼして、御乳母の家、九

条わたりにある所へ移ろはせなど、人知れず構へ給へば、

女は、いかげなり果つべき身にかと、焦れまさりて、と

にかくに、わが身を亡きものになさばや、と思ふなり。

げに、ことわりなれや。河の音なひを聞くにも、わが身

の置き所と、あはれにて、薄衣に袴ばかりにて、人の寝

たる間に、妻戸押しあけて、行くべき方も知らず、顔に

袖をおし当てて、さめざめと泣きて、縁より足を踏み下

ろして、鬼にても神にても、われを連れて行けかしと、

泣き入りたるに、かの宮とおぼしき男の、直衣姿なるが、

出で来りて、「いざさせ給へ」とて、かき抱きて行く。こ

れは、木魂なりけり。もて行きて、平等院の後ろに、大

きなる木の下に、捨てたりしを、小野の尼、初瀬より下

向に、見つけてとりて、小野へ行きて、やうやう加持し、

なほさせ、いたはりて、人となして後こそ、尼になりし

か。さては、宇治に木魂といふことあるべし。木魂に取

られしころは、三月の末なり。

八 蜻蛉

燕二十六歳の秋までなり。

この巻を蜻蛉といふことは、かの浮舟、跡形なく失せて後、薰大将よみ給ひしなり。蜻蛉の飛びかふを見て、ありと見て手には取られずはかなくて

行くへも知らず消えしかげろふ

さて、浮舟、骸をだに残さず、あとはかなくなりしかば、母の嘆き、推しはかるべし。人目もあさましくて、残し置きたりける御衾、調度などをぞ、取り集め、鳥辺野に送り、行くへなく煙となししなり。

○かげろふ ○跡形なき

○水の泡と消えし ○残る衾や煙なるらん

宮、ひたすらの御嘆きに伏し沈ませ給ふ。侍従といひし女、宮、障泥敷きて物語し給ひし折の女房なり。これを、後には宮の御方へよび給ひて、御母中宮の御方に侍はせて、こよなき形見に御覧じける。

九 手習ならひ

薰大将二十六より
二十七歳までなり。

この巻を手習といふことは、浮舟、小野の尼に連れられて、小野に住みけり。あらぬ世に生まれたる心地して、誰に、わが身のことをも古郷のことをも言ふべきなれば、つくづくと手習をして、硯に向かひて、思ふことを歌によみしなり。この巻より、手習の君と心得べし。小野の尼のとりし初めは、尼、八十ばかりなる母など引き連れて、初瀬へ参りて、下向に、宇治に中宿り、この尼の兄北山に尊き聖にてあり。つれだちけるほどに、一後ろの木の下に、あやしきものあり」など、ののしる。行きて見れば、いとうつくしく若き女房の、白き衣の移り香もなべてならぬに、赤・き袴着たり。尼、初瀬にて夢を見たりとて、この聖に加持させて、連れて行きて、もてなし、いとほしみけるほどに、この尼のむすめ、はかなくなりたりしが、昔を婿忘れず、小野へ常に來ける。この人を見て、昔の御代はりにと言ひわたりけるを、むつかしきことに思ひて、尼の、又初瀬へ参りたる間に、山より聖

下り給ひけるに言ひて、尼になりたりける。かくて、やうやう、都の事ども思ひ出して、身を投げんとて出でたりしに、宮と思ひし人に連れられて行くと思しほどに、身の行くへ知らず、いかがなりけん、あさましくて、身を投げし涙の川の早き瀬に

しがらみかけて誰か止めし

月おもしろげに、つくづくとながめて、

心には秋の夕べをわかねども

眺むる袖に露ぞこぼるる

秋深くなりゆけば、大方の空のけはひもあはれなるに、まして、物思ふ袖の上、思ひやるべし。住む所は、かの夕霧の御息所のおはします山里よりは、いまま少し入りて、山に片かけたる家なれば、松蔭繁く、風の音もいと心細し。門田の稲を刈るとて、若き女どもの、歌うたひ、物まねしつづ、引板引き鳴らすも、見し東路の心地して、あはれなり。月明かき夜、うちながめて、われかくて憂き世の中をめぐるとも

誰かは知らん月の都に

事にふれて、宮の御面影の忘れぬもあさましく、さり

とも忘れ果て給はじと思ふも、いとあはれなり。春にもなりぬれば、いとど昔の春のみ恋しくて、閨の端近き紅梅の、色も香も変はらぬも、「春や昔の」とこそ、花よりもこれに心寄せ、著く・飽かざりし御匂ひの染みけるにやと、みながらあさましくて、

袖ふれし人こそなけれ花の香の

それかと匂ふ春のあけぼの

さて、大将、思ひかけぬゆかりに聞き給ひて、たづね

給ふ。小野にはこの歌のことは

思ひよそへて付くべし

十 夢浮橋ゆめのうきはし

法の師とも。
薰三十七歳の事なり。

この巻は夢の浮橋といふことは、源氏、わが御さかりの榮華をはじめ、御身の才も世に越え、品高く生まれ給ひて、御かたちは光るとさへ言はれて、御心に残るところなく、いみじくおはせしことも、夢のごとくにて、ただ一節の御嘆きを善知識として、雲隠れ給ふ。又、かやうに、ことは多く作り出せる物語も、果ては無常を知らせんためなれば、夢の浮橋といふなり。

さて、この巻に、薰大将、聞き出し給ひて、手習のものと弟常陸の守が子を、昔の戀みに召し出して使はせ給ふを、御使にて、御文、小野へつかはさるる。しるべなくてはいかがとて、かの人を尼になしなどせし僧都に仰せて、御文を薰大将の御文に取り添へて、行きしなり。大将の文に、

法の師と尋ぬる道をしるべに

思はぬ山に踏み迷ふかな

と、ありしなからの御手にて、御匂ひもさながらなるを、見し手習の、心の中、さこそありけめ。御返しもいかにぞや。あきれぬるやうにて、泣くと、本には候ふなり。

その後、山路の露といふ物を、人作りて、訪ねあひて対面し給へり、と作り侍る。それ五十四帖の外なれば、これにはあるまじく候ふなり。

『源氏小鏡』連歌用語集